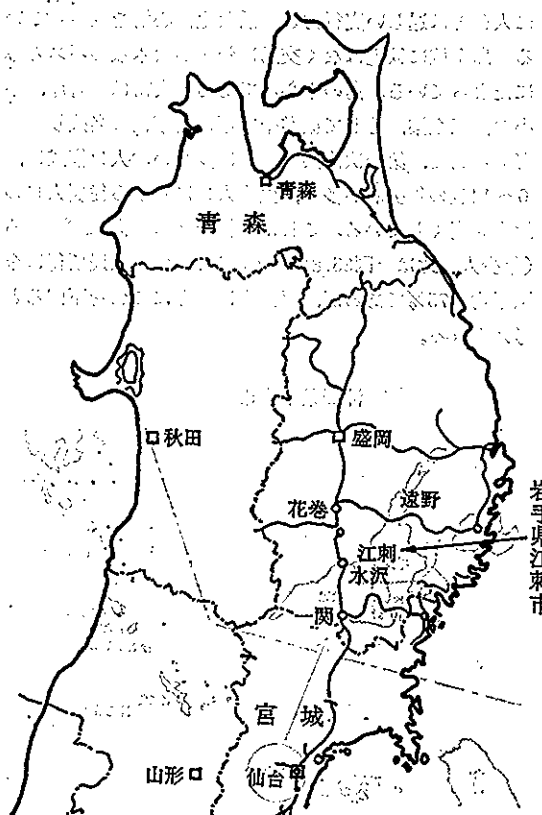


江刺市(岩手)

江刺市は岩手県の中南部に存する。昭和30年に1町9村を合併した江刺町が33年に市制施行となった。東北本線水沢駅から東にバスで20分、市の交通は中心部から放射状に運行されるバスで鉄道はない。市の面積360.77²の約50%は山間地帯であり、市といっても市街地の少ない純農山村性格の強い地域である。市制施行当時の50,000人の人口はその後激減し現在37,000人、昭和46年以来過疎地域に指定されている。人口減少の推移の中で高年齢化が進み、60歳以上の人口割合は20%に及ぶ。産業は第一次産業が重要な位置を占め、農業は米を中心に畜産、果樹、養蚕等の複合経営が主体である。農家一戸当りの耕地が少なく生産性が低い。住民所得は県平均の89%、山村地域では62.5%にとどまる。近年来、経済発展を図るための誘致工場が増加しつつある。

住民は土地と結びつき三世代家族が多く、純朴で地域ぐるみ協力して生活している。(一方)市の中心部は鉄道に見離される前の医学、教育をはじめ文化隆盛の中心地であった岩谷堂(江刺町の前身)の歴史を誇りとし、現在も教育・文化・福祉的活動は活発である。



2. 手続きおよび対象

1) 母親の意識調査

母親の養育意識、育児の実感、子どもの生活、福祉充足度意識などの質問紙による調査(付1)を施行する。

対象 各地域1歳児50名(保育所児25、家庭児25)、3歳児と5歳児それぞれ100名(保育所児50、幼稚園児50)、7歳児100名(小学2年)の母親を目標とした。しかし、沖縄の平良市においては、保育所は5歳未満を対象とし、5歳児は全員幼稚園通園となり、また、平良市では小学校児童数が多く、一校で2学年児童数が100名をはるかに超過するが、岩手県江刺市では2学年の児童数が24名の学校もあり三校で100名に達するなど、地域による差がみられた。第1表は回答不備のもの、父子家庭(12名)を除いた対象数である。調査対象施設はつぎに示すものである。

沖縄(平良市)——馬場保育所、南保育所、みつば保育所、花園保育所、北幼稚園、みつば幼稚園、北小学校

岩手(江刺市)——聖愛ベビーカーホーム、米里保育所、伊手保育所、江刺保育園、愛宕保育園、八日市幼稚園、伊手小学校、愛宕小学校、玉里小学校

東京(江東区)——南砂第五保育園、すみれ幼稚園、南砂西小学校、南砂東小学校

多摩(多摩市)——みさと保育所、多摩みゆき幼稚園

第1表 調査対象

		1歳	3歳	5歳	7歳	計
沖 縄	男	13	68	61	56	198
	女	13	63	63	73	212
	計	26	131	124	129	410
岩 手	男	27	47	57	57	188
	女	22	56	53	50	181
	計	49	103	110	107	369
東 京	男	30	46	71	49	196
	女	23	45	71	44	183
	計	53	91	142	93	379
合 計	男	70	161	189	162	582
	女	58	164	187	167	576
	計	128	325	376	329	1,158

2) 子どもの身体発育検査

3歳児対象に健診と身体測定および貧血の検査を施行し、子どもの発育状況、罹病、栄養状態を把握する。(付2)

3) 上記の3歳児を対象に、調査前日3日間の食事、間食の内容を記述してもらい、さらに面接を加え児童の

食生活の実状を詳細に把握する。(付3、4) (4) 夜間就労の母親の児童養育の実態について病院勤務の看護婦(各地域50名)を対象に質問紙法による調査を行う。(付5) (5) 現地に赴き、地域の自然環境、地域住民の生活実態を観察し、母親と子どもの生活の背景を把握する。(6) 地域の福祉、教育、保健関係の地域の実情を熟知している有識者たち(各地域10名内外)と研究スタッフとの合同会合をもち、今回の種々の調査の裏づけとなる資料を得る。(7) 保育所待機児数の年間推移、保育所設置状況、医療機関、地域の生産、食品の需給状況他、教育機関、福祉施設の設置状況など各種資料を蒐集して福祉施策の実態を把握する。

III 結 果

3.1. 児童養育と身体発育・健康状態
 (1) 児童の健康状態について
 我が調査対象として選んだ、東京・岩手・沖縄の三地域の児童の健康状態を概観するために、健康診査及び栄養状態判断の一助として血液検査を実施した。

第2表 身体発育状況

地 域	性 別	年 月 齢	身長 (cm)		体重 (kg)		カウプ指数	
			平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
岩 手	男	3:0~3:5	95.4	3.3	14.5	1.7	15.8	1.3
		3:6~3:11	97.7	4.5	14.6	1.7	15.2	0.9
		4:0~4:5	99.9	3.7	15.4	1.3	15.4	0.7
沖 縄	女	3:0~3:5	94.4	3.1	13.8	1.3	15.4	0.9
		3:6~3:11	97.5	3.7	14.7	1.9	15.4	1.2
		4:0~4:5	101.7	3.7	16.0	1.9	15.4	1.2
東 京	男	3:0~3:5	94.1	3.0	14.5	1.5	16.3	1.2
		3:7~3:11	96.9	3.5	14.9	1.2	15.8	0.8
		4:0~4:5	100.0	2.8	16.2	1.1	16.2	1.1
東 京	女	3:0~3:5	93.6	3.3	13.6	1.5	15.8	1.2
		3:6~3:11	96.1	3.1	14.4	1.3	15.5	1.0
		4:0~4:5	101.1	4.4	16.1	1.9	15.7	1.2
東 京		3:7~4:7	99.7	4.5	16.1	1.4	16.2	1.0

第2表に示したように身長・体重において、男女児とも岩手群と沖縄群との間に著明な発育の差を認めることができなかった。計測値とカウプ指数を昭和45年度身体発育調査結果と比較しても必ずしも劣っているとはいえない。すなわち10パーセント以下(以下)の値を呈するものの頻度は、岩手群では身長に関して5.8%、体重において6.7%、沖縄群ではそれぞれ7.0%、6.3%となっており、両地域間に著明な差も認められない。また90パーセント以上の値を呈するものは岩手群では身長16.5%、体重16.3%、沖縄群ではそれぞれ6.3%と8.7%と、やや沖縄群が少ない。肥満傾向にあるもの(ここではカウプ指数18.0以上)は岩手群1.9%、沖縄群1.6%とこれも差は全くない。この頻度は厚生省心身障害研究・幼児肥満研究班の調査報告に比して少ない。

以上のことから、沖縄群は岩手群に比して大きい体格の子どもは少ないが、全体としては問題となる発育状態を呈した幼児はおらず、岩手群では身長90パーセント以上を呈したものの割合が沖縄より多かったとはいえず、発育上のひずみを示したものはなかった。すなわち、沖縄県の一離島、岩手県の一山間地域における3、4歳児には身体発育上の問題は認められなかった。

(2) 精神運動機能発達状態
 保護者または保育者に対して、個々の幼児の精神運動機能発達状態をアンケートにより調べ、疑い場合には診察によって確認した(東京群については行っていない)。調査項目は、片足とび(片足ケンケン)、歩行、ペーじめくり、△○描写、名前をいう、二語文をいう、顔をかく、積木で家を作る、の7項目である。これらが不可能であったものの割合は第3表に示すように、項目によっては地域による差がみられる。粗大運動は岩手群が優れており、特に「片足とび」は岩手群が有意に優れている(P<0.005)。また、微細運動に関して沖縄群より岩手群が劣っているものが多いという結果を得ているが、有意差を認めるには至っていない。

第3表 幼児(三歳児)の精神運動機能発達

項 目	地 域			
	岩 手 県	沖 縄 県		
	人	%		
片足とび(ケンケン)	7	6.4	17	15.3
(転びやすい)	2	1.8	4	3.6
本のページを1枚づつめくる	0	—	1	0.9
△や○を書く	7	6.4	10	9.0
(自分の名前が)いえる	2	1.8	2	1.8
二語文がいえる	3	2.8	1	0.9
顔を書いたり積木で家を作る	15	13.8	13	11.7

(注) 「できないもの」のみを記す。

このような結果が出たことは、精神運動機能発達に地域の条件も無視できない要因であることを示すものであり、沖縄群を例にとつていえば、離島といつても密集した地域に保育所が設置されており、園庭もさして広くないうえに、家庭に帰ってから思い切って遊べる環境にないことが影響したものと思われる。

(8) 診査結果

う歯罹患率は、岩手群・沖縄群が非常に高率で、それぞれ78.6%、81.2%であった。

その他の異常については、東京群では著明な疾病異常がなく、岩手群では喘息性気管支炎、沖縄群ではカイセンが主なもので、他には著明なものは認められなかった。沖縄群では皮膚疾患、感染症の罹患が多い。

集団生活を営んでいる幼児では感染症は十分に管理されるべきである。朝の登園時に視診(健康観察)を適切に行なう能力をもった職員の配置が望まれる。

健診と同時に血色素量の検査を実施した。検査法はフアントヘモグロビン法による。結果は、東京群 13.9±0.9g/dl、岩手群 11.8±1.6g/dl、沖縄群 13.1±1.0g/dl と岩手群が低値を呈している。血色素量が 10.9g/dl 未満のものは東京群には1名もいないが岩手群25名(22.9%)、沖縄群3名(2.7%)で、特に9.9g/dl 以下は岩手群に15名(13.8%)にも達しており、非常に高頻度ということになる。

(2) 小児保健的視点からみた養育上の問題

(1) 妊娠・出産について

調査対象児童の妊娠中の経過を第4表に示した。ここでいう妊娠中毒症とは浮腫、高血圧、蛋白尿の何れか一つだけ存在したものも含まれている。妊娠中毒症の頻度が沖縄地方に少ないことは他の報告にもみられる結果と同じであるが、貧血の発生も沖縄群が少なく一般に異常は少ない。

第4表 妊娠経過

	異常なし	異常あり				不明
			妊中毒症	貧血	他	
沖 縄	345人 (86.3%)	43 (10.5)	30 (7.3)	24 (5.9)	5 (1.2)	13 (3.2)
岩 手	282 (76.4)	75 (20.1)	53 (14.4)	31 (8.4)	10 (3.5)	12 (3.3)
東 京	296 (77.8)	76 (20.1)	47 (12.4)	41 (10.8)	18 (3.4)	8 (2.1)
計	931 (80.4)	194 (16.8)	130 (11.3)	96 (8.3)	33 (2.8)	33 (2.8)

対象児童の出生時の状況について検討した。低出生体重児は全体で46名(4.0%)で、全国的な統計と比較すると低率である。特に、沖縄群は12名(2.9%)にすぎ

ないのは沖縄県の低出生体重児に関する統計と比較して余りにも少ないので、正確な情報を得たものとは思われないのが残念である。また、仮死の頻度は全体で1.6%で、岩手群が9名(2.4%)と最も多い。仮死の頻度は個々の胎児期(分娩中を含む)の経過により左右されるであろうが、仮死で出生した新生児に対する管理がいかになされるかは、その地域の周産期医療の状況を評価する指標となりえると考ええる。

(2) 児童の健康状態の評価

母がそれぞれの児童の健康状態を如何なるものと評価しているかを調べた。児童が「健康」であったとこたえているものが全体で、80.9%で、「健康でなかった」、「病気がち」とこたえているものは17.5%にみられ、地域別にみると東京群で「健康でない」、「病気がち」とこたえているものの割合が最も高く20.3%を占め、沖縄群が12.6%と最も少ない(P<0.05)。

さらに、児童の体質をどのように評価し認識しているかを、5症状の有無について調査した。すなわち、咳・喘鳴、発熱、腹痛、嘔吐、痙攣についてその頻度を調べ、第5表-①、第5表-②にその結果を示した。

咳・喘鳴の発生頻度が多いのは生理的にも咳・喘鳴の多い幼児期を対象としたことにもよろうが、地域別にみると岩手群で症状をもったものが最も多い。年齢別に検討すると、咳・喘鳴は比較的年齢の低い群に、腹痛は高年齢群に多くみられるが、これは小児の罹患傾向からみて当然の結果といえる。第5表に示した家族形態別、母の就労状況別の結果からは、児童の健康状態には家庭の環境条件が大きく関係していることがわかる。すなわち、全ての症状が三世代家族に多くみられた。また、パートを含む勤務をもつ母が症状について多くを訴えていることから、家庭における母をとりまく状況によって、母が児童の症状をどう受けとめるかが異なってくるものと考えられる。

(3) 健康増進についての認識

児童の健康増進のために必要な事項についての母の認識の程度を調べた。その結果は第6表に示した。「食事・栄養摂取が最も大切」としているものが最も多く、特に沖縄群、大学卒の母に多くみられた。児童の年齢による差はない。「体力づくり」、「環境整備」を必要な事項としている母がそれぞれ24.7%、16.6%となっているのに対して、「定期的な健診」、「予防接種」をあげているものは比較的少ない。「体力づくり」は東京群、「環境整備」は岩手群に多いのは地域特性を著明に表現しているものと思われる。健康増進に大切なものは「特になし」と考えているものは全体で3.1%にみられ、沖縄群、中

内藤他：家庭の機能変化に伴う福祉需要と児童の養育に関する総合的研究

第5表-1 児にみられる症状について(1) 体質

地域別・年齢別

	地域別			児の年齢				総計
	沖縄	岩手	東京	一歳児	三歳児	五歳児	七歳児	
咳・喘鳴	53人 (12.9%)	55 (14.9)	45 (11.9)	25 (19.5)	44 (13.5)	41 (10.9)	43 (13.1)	153 (13.2)
発熱	34 (8.3)	64 (17.3)	50 (13.2)	19 (14.8)	45 (13.8)	47 (12.5)	37 (11.2)	148 (12.8)
腹痛	25 (6.1)	25 (6.8)	12 (3.2)	2 (1.6)	13 (3.0)	23 (6.1)	24 (7.3)	62 (5.4)
嘔吐	13 (3.2)	21 (5.7)	12 (3.2)	3 (2.3)	21 (6.5)	16 (4.3)	6 (1.8)	46 (4.0)
痙攣	7 (1.7)	12 (3.3)	11 (2.9)	2 (1.6)	12 (3.7)	13 (3.5)	3 (3.5)	30 (2.6)
(対象児数)	(410)	(369)	(379)	(128)	(325)	(376)	(329)	(1,158)

注) 「症状なし」は除く

第5表-2 児にみられる症状について(2) 体質

	家族形態			勤労状態			
	核家族	三世家族	家事のみ	家業	内職	常勤	パート
咳・喘鳴	97人 (12.6%)	49 (14.7)	43 (11.9)	17 (9.8)	14 (15.4)	62 (14.9)	15 (15.5)
発熱	89 (11.6)	56 (16.8)	34 (9.4)	24 (13.9)	7 (7.7)	61 (14.7)	19 (19.6)
腹痛	38 (4.9)	21 (6.3)	19 (5.3)	16 (9.2)	5 (5.5)	19 (4.6)	3 (3.1)
嘔吐	28 (3.6)	15 (4.5)	8 (2.2)	7 (4.0)	2 (2.2)	19 (4.6)	9 (9.3)
痙攣	18 (2.3)	11 (3.3)	8 (2.2)	2 (1.2)	3 (3.3)	12 (2.9)	3 (3.1)
(対象児数)	(769)	(333)	(360)	(173)	(61)	(415)	(97)

注) 「症状なし」は除く

第6表 健康増進についての認識

	地域別			母の学歴			児の年齢				総計
	沖縄	岩手	東京	中学	高校	大学	一歳児	三歳児	五歳児	七歳児	
食事・栄養	184人 (44.9%)	124 (33.6)	132 (34.8)	84 (36.8)	181 (37.2)	88 (40.6)	42 (32.8)	123 (37.8)	145 (38.6)	130 (39.5)	440 (38.0)
睡眠	36 (8.8)	58 (15.7)	55 (14.5)	30 (13.2)	72 (14.8)	24 (11.1)	12 (9.4)	45 (13.8)	49 (13.0)	43 (13.1)	149 (12.9)
体力づくり	72 (17.6)	88 (23.8)	126 (33.2)	47 (20.6)	139 (28.5)	58 (26.7)	35 (27.3)	76 (23.4)	102 (27.1)	73 (22.2)	286 (24.7)
予防接種	2 (0.5)	3 (0.8)	2 (0.5)	4 (1.8)	3 (0.6)	0 (0)	2 (1.6)	1 (0.3)	2 (0.5)	2 (0.6)	7 (0.6)
定期健診	21 (5.1)	4 (1.1)	4 (1.1)	9 (3.9)	11 (2.3)	1 (0.5)	2 (1.6)	12 (3.7)	4 (1.1)	11 (3.3)	29 (2.5)
環境整備	63 (15.4)	78 (21.1)	51 (13.5)	35 (15.4)	69 (14.2)	43 (19.8)	30 (23.4)	59 (18.2)	55 (14.6)	48 (14.6)	182 (16.6)
特になし	20 (4.9)	13 (3.5)	3 (0.9)	13 (5.7)	6 (1.2)	0 (0)	4 (3.1)	6 (1.8)	10 (2.7)	17 (4.9)	36 (3.1)
わからない	12 (2.9)	1 (0.3)	4 (1.1)	6 (2.6)	4 (0.8)	3 (1.4)	1 (0.8)	3 (0.9)	8 (2.1)	5 (1.5)	17 (1.4)
計	410 (100.0)	369 (100.0)	379 (100.0)	228 (100.0)	487 (100.0)	217 (100.0)	218 (100.0)	325 (100.0)	376 (100.0)	329 (100.0)	1,158 (100.0)

学歴不明を除く

第7表 児の発病とその対応に関する問題点

	児の年齢				地域別			家族形態				総計
	一歳児	三歳児	五歳児	七歳児	沖繩	岩手	東京	核家族		複合家族		
								片親	両親	三世代	他復の合	
相談相手について	0 (—)	1 (1.1)	4 (2.8)	1 (1.1)	4 (1.0)	5 (1.4)	6 (1.6)	2 (6.7)	12 (1.6)	0 (—)	1 (2.1)	15 (1.3)
看病する大人不在	6 (11.3)	11 (12.1)	11 (7.7)	0 (—)	16 (3.9)	14 (3.8)	28 (7.4)	3 (10.0)	44 (6.0)	11 (3.3)	0 (—)	58 (5.0)
休業・欠勤	26 (49.1)	30 (33.0)	32 (22.5)	4 (4.3)	112 (27.3)	97 (26.3)	92 (24.3)	15 (50.0)	177 (24.0)	97 (29.1)	8 (17.0)	301 (26.0)
医療機関に不便	2 (3.8)	3 (3.3)	5 (3.5)	5 (5.4)	16 (3.9)	73 (19.8)	15 (4.0)	0 (—)	38 (5.1)	58 (17.4)	7 (14.9)	104 (9.0)
医療費が高い	3 (5.7)	10 (11.0)	25 (17.6)	25 (26.9)	32 (7.8)	49 (13.3)	63 (16.6)	1 (3.3)	104 (14.1)	30 (9.0)	8 (17.0)	144 (12.4)
困ることなし	16 (30.2)	29 (31.9)	51 (35.9)	49 (52.7)	194 (47.3)	98 (26.6)	145 (38.3)	5 (16.7)	302 (40.9)	109 (32.7)	19 (40.4)	437 (37.7)
わからない	0 (—)	4 (4.4)	5 (3.5)	1 (1.1)	18 (4.4)	12 (3.3)	10 (2.7)	2 (6.6)	24 (3.3)	13 (3.9)	0 (—)	40 (3.5)
対象児数	(53)	(91)	(142)	(93)	(410)	(369)	(379)	(30)	(739)	(333)	(47)	(1,158)

年齢不明は除く

家族形態不明は除く

学卒の母、7歳児の母にやや多く認められる。また「わからない」と答えているものも沖繩群、中学卒の母にやや多い。これらの点からみて、児童の健康に対する認識に地域差、母の学歴差がはっきりしていることを注意しておく必要があることがわかる。

(4) 児童の病気とその対応に関する問題点

児童が発病した時の即応対策に何らかの社会的障害と思われる問題があるか否かということは、児童の健康管理に重要な意義をもっている。その問題点には児童の年齢、地域、家族形態によって著明な差があることは第7表にみられる通りである。相談相手がいないことは核家族、特に母子家庭では深刻な問題となっている。欠勤・休業する母が多いのは幼稚園児に較べて保育所児童が多く調査対象になっていることから当然であろうが、児童の年齢が小さいほどその割合は多数であり、母子家庭にも多い。

医療機関が近くにないことは岩手群において問題となっており、沖繩では一離島を調査地域としたにもかかわらず、この点があがってきていない。これは県立病院が一つあることと開業医も比較的多く存在し、医療機関を利用しやすいと思われる。また、駐在制による保健婦活動が住民に十分に浸透しているものと考えられる。

医療費の問題が児童の年齢が長ずるにつれて問題として取り上げられている。罹患頻度は年少児ほど高いはずであるにもかかわらず、罹患頻度の下ってくる高年齢になって医療費のことを母が問題として認識している点は、罹患頻度は少なくともその病気の種類により高い治療費を要するものと解釈されるべきであろう。

困ることがないといっているものは全体で37.7%あり、年齢が大きくなるにつれてその率が高くなるのは当然であろうが、地域別にみると沖繩群に最も多く、逆に何か困ることがあるのは岩手群に多かった。母子家庭においては対象26家族中、困ったことなしは5家族で、逆に言えば、約80%は困っているということである。母子家庭には特に保健上の細かい配慮がなされるべきであろう。

(6) 小 括

小児保健的視点から養育上の問題点を検討した。児童の健康は自然及び人的、生活環境条件の影響を強く受けることは古くから指摘されている。環境条件の一つとして地域特性をあげることができるが、沖繩・岩手・東京という異なる特性をもった地域においてそれぞれ発生する保健上の問題は必ずしも異なっていないことが今回の調査で明らかになった。それらの共通した問題に対する行政指導の地域差は縮まっていると言われる昨今であるが、それは全国的に実施されている健診などの保健事業の形態に地域差がないということであろう。同じ事業が各地で実施されているという点で母親達は安心しているのであるが、厳密にその内容をみれば、まだ地域差があるのが現状である。しかし、内容の差については母親達のほとんどが知り得ない状況にあり、それが児童の健康面における問題と何らかの関連があることには気付かず終ってしまう。従って、今回の調査で3地域に共通してあげられる保健上の問題点については、全国的な行政指導の充実を望みたい。

一方、児童の健康状態についての母による評価や把握は、母をとりまく家庭生活環境など諸々の条件によって

差異を認めることが今回の調査で明らかとなった。これは保健対策を考える上で重要な要件となる。特に「困ったことがない」という答えや、症状発生に関する認識などでは、母のおかれた環境条件が強く影響している。沖縄群を例にとれば、健康状態の評価で「病気から」「健康でない」と答えたものの割合が3群中最も低く、健康増進に大切なものが「特にない」「わがらない」と答えたものが他群より多かった。更に、児童の病気に対する対応で「困ることなし」と答えたものが群中最も多い。以上を総合しどうとらえて、保健対策を行うか熟考を要する。すなわち、沖縄群における母の児童の健康に対する認識が低いものであると、みなすならば、対策として知識の導入を考えるべきである。

以上の点から、母親の養育行動が児童の健康面に出現する問題とどのような関連があるかを証明していくことにより、養育行動のよりよい変革がすすめられることを望みたい。

2 子どもの食生活の実態と栄養摂取状況

1) 目的

乳幼児期の生活に於て食事の占める位置は大きい。乳幼児期の栄養が子どもの体格、健康を左右し、かつ家庭における食生活の在り方が現在は勿論、将来にわたる心身の発達に及ぼす影響の大きいことは屢々報告されている。そこで乳児死亡率の高い県である沖縄（離島H市）岩手（過疎農村E市）の幼児食生活を調査し、問題を探り、改善の方途を見出したいと考えた。

2) 方法

(1) 子どもの食事に関する調査

- ① 乳児期の栄養法について
- ② 母親の栄養、健康に対する関心度
- ③ 家庭生活における食事及びおやつとの在り方
- ④ 食事及びおやつに関する問題と対策

(2) 3歳児の食生活実態調査と健康診断

食事の内容を更に詳細に知り、健康との相関に於て見たいと考え、特に3歳児について次のような調査を行なった。

① 質問紙によるアンケート調査

総合調査（母親の児童養育に関する調査）の質問紙と共に、下記の質問紙を対象家庭に配布し、3歳児の母親に記入して貰って健診日までに回収した。更に健診の折、母親に面接して不備を補い回答の正確を期した。

- ② 最近3日間の朝・昼・夕の食事調査
- ③ 食品調査：日常よく用いる食品について、対象児の嗜好、摂取回数、購入方法等について
- ④ 健康診断と血色素量について

健康診断と沖縄では静脈血、岩手、東京では耳朶血を採血し、血色素量を測定した。

3) 調査対象

- (1) 総合調査の対象については、208頁参照
- (2) 3歳児食生活実態調査対象は次の通りである。

対象保育園及び幼稚園

沖縄県H市	岩手県E市	東京都T市
H幼稚園 20	Y幼稚園 36	C幼稚園 14
M幼稚園 21	Z保育園 13	F幼稚園 14
H保育園 18	A保育園 24	
M保育園 16	E保育園 20	
N保育園 14	I保育園 6	
D保育園 22		
計 111	計 99	計 28

4) 調査結果と考察

(1) 子どもの食事に関する調査

① 乳児期の栄養について

今回の調査では生後3ヶ月の母乳栄養児は全国平均（1978年）37%に比し、東京は略同値、沖縄はこれより5%高く、岩手は5%低い。

また3ヶ月の時点で混合栄養を含め、いくらかでも母乳を与えている母親は沖縄73、岩手59、東京61%となっている。

② 栄養に対する母親の関心度

母親の栄養、健康に対する関心度によって家族の食事は左右される。そこで次の3点から食事に対する母親の関心度を観察した。

① 食事をつくる時にまず考えることは次の項目の中どれに近いかを聞いた。

- ② 健康、栄養面から考える
- ③ 家族の好き、嫌いを考える

④ 調理時間や手間のかからないものを考える

健康、栄養面を考えて食事をつくる母親は東京が最も高く、次いで沖縄で各年齢に於て沖縄は岩手より有意に高く、7歳児では63%前後と殆ど東京と同値であった。

②、③共に岩手が高く特に「手数、時間のかからぬもの」を考えるのは各月齢共岩手の母親が多かった。

(第1表)

⑤ 家庭の食習慣について

a 家族バラバラの食事

最近家庭の食生活の乱れが嘆かれているが、家族がバラバラにたべている家庭は、各年齢平均値でみると朝食では15%前後、地域別によると沖縄が最も少なく、5～

第1表 食事調製の視点

		時間・手 数のか らぬもの	健康・栄 養を考 えて	家族の好 き・嫌 きを考 えて	その他	不明
1 歳	沖縄	15.4	65.4	11.5	3.8	3.8
	岩手	22.4	51.0	16.3	6.1	4.1
	東京	5.7	75.5	17.0	0	1.9
	平均	14.1	64.1	15.6	3.1	3.1
3 歳	沖縄	11.5	59.5	26.7	0.8	1.5
	岩手	15.5	37.9	37.9	2.9	5.8
	東京	4.4	72.5	15.4	3.3	4.4
	平均	10.8	56.3	27.1	2.2	3.7
5 歳	沖縄	8.1	62.9	21.8	1.6	1.5
	岩手	10.9	46.4	35.5	2.7	5.8
	東京	8.5	64.8	18.3	2.1	4.4
	平均	9.0	58.8	24.5	2.1	5.6

10%,岩手ではやや高く3,5歳児で20%程度みられた。
夕食では全平均5%前後で朝食より少なかった。地域
別では岩手が最も少なく2~5%であった。家族揃って
食べている家庭は東京30%前後,沖縄,岩手の1/2で最も

第2表 食事上の問題

		問 題 な し	問 題 あ り							不 明	
			総 計	偏 食	食 が 細 い	大 喰 い	む ら	遊 び ぐ い	そ 他		
1 歳	沖縄	46.2	53.8	19.2	7.7	0	3.8	26.9	3.8	0	0
	岩手	34.7	57.1	10.2	12.2	6.1	12.2	26.5	0	0	8.2
	東京	41.5	56.6	11.3	5.7	0	18.9	24.5	1.9	0	1.9
	平均	39.8	53.0	12.5	8.6	2.3	13.3	25.8	1.6	0	3.9
3 歳	沖縄	35.9	61.8	16.0	16.8	1.5	7.6	22.1	3.1	0	2.3
	岩手	34.0	65.0	16.5	18.4	1.0	18.4	20.4	0	0	1.0
	東京	42.9	54.9	9.9	19.8	0	9.9	19.8	1.1	0	2.2
	平均	37.2	60.9	14.5	18.2	0.9	11.7	20.9	1.5	0	1.8
5 歳	沖縄	49.2	44.4	15.3	19.4	3.2	3.2	7.3	0	0	6.5
	岩手	35.5	56.4	24.5	17.3	1.6	9.1	12.7	0	1.8	8.2
	東京	43.0	54.9	18.3	20.4	0	17.6	12.0	0.7	0.7	2.1
	平均	42.8	51.9	19.1	19.1	1.6	10.4	10.6	0.3	0.8	5.3
7 歳	沖縄	51.2	41.1	13.2	14.7	0.8	4.7	7.8	0.8	0.8	7.8
	岩手	42.1	53.3	24.3	15.9	1.9	14.0	11.0	0	0	4.7
	東京	55.9	41.9	19.4	14.0	2.2	5.4	2.2	1.1	0	2.2
	平均	47.5	45.3	18.5	14.9	1.5	7.9	7.3	0.6	0.3	5.2
総 計		42.8	53.0	16.9	16.5	1.5	10.4	14.2	0.9	0.3	4.1

少なかったが、これはサラリーマン家庭が多いためであ
る。

b 食事の回数
子供の身体は成長過程にあるので、プロキロ当りのエ
ネルギー、蛋白質必要量はおとなの2.5倍程度になる。
したがって一食抜けば食事の間隔が長くなり、間食が多
くなる。菓子類は糖質が多く身体構成素やビタミン類の
少ないものが多いので、子どもの健康な成長が妨げられ
る場合が多い。

本調査では、朝食を「時々」または「しばしば」抜く
子供は各年齢共沖縄に多く(20~30%)みられ、特に3
歳児では37%にも達している。東京では各年齢共90%以
上の家庭が毎食きちんと食べていた。

これは成人についてであるが、岩手県の実施した食生
活調査では朝食を毎朝きちんと食べているものは農村96
%,都市81.3%となっていた。本調査では岩手は80%
(1歳)~93%(7歳)と年齢と共に上昇していた。

④ 食事及びおやつに関する問題

a 食事に関する問題

第2表は対象児について食事に関する問題がどの程度
みられるか、次の5項目について質問した結果である。

「問題なし」は7歳児で50%、その他の年齢では平均40%前後で、3地域の中岩手に最も問題のない子供が少ない傾向がみられた。

b おやつに関する問題

「大体一定の時間」におやつを与える母親は、1歳児平均で45%であるが年齢が進むにつれて不規則になり、7歳では35%と漸減している。地区別にみると、大体一定しているものは東京が最も高く50~60%を占めているのに対し、沖縄では「日によって違う」が40~60%（3歳児を除き）を占めている。これは朝食抜きの子どもが岩手に多いということに関係しているのではないかと考えられる。

おやつの与え方については、東京では母親が用意して与える比率が圧倒的に高く、5歳児の80%以上はすべて90%以上である。岩手もほぼ母親が用意していた。自分で買った食べるものは沖縄5%、7歳に20%程度みられた。この中金額を決めて与えるものと、自由に買わせているものの比率は半々であった。

(2) 3歳児食生活の実態調査と健康診断

① 身長及び体重は第2表のよう男女両群の間に殆ど差はみられず、また1980年乳幼児身体発育調査結果と比較するとその中央値と略同値であった。(209頁参照)

② 血色色素量について
平均血色色素量は沖縄 12.6±1.3g/dl、岩手 12.0±1.9g/dlで岩手が低値を示し、また10.9g/dl以下の比率は岩手に有意に多く、特に9.9/dl以下が13.8%もみられた。(210頁参照)

東京では採血に協力を得ることが困難で、血色色素量の測定出来た子どもは1園のみ、3歳児園14名中11名であった。その結果はすべて11/dl以上、平均13.9±1で優秀な成績を示した。

③ 連続3日間の食事記録より
対象児が摂取した連続3日間の朝夕の家庭食について評価した。

a 朝食と夕食のパターン
朝食のパターンをみると沖縄はパン、牛乳、またはうどん、卵という洋風パターンが約半数を占め、少数例ではあるが、菓子パンのみというものもみられた。I群では、ごはんを主食とするもの90%にみられ、みそ汁、卵、納豆、または焼魚、干物、肉、水ぶりがけ、漬物等が用いられていた。
市販のインスタントもの(カップ麺、ハンバーグ、シューマイなども)両群共4%程度が用いていた。

(岩手県で行ならた主食についてのアンケート調査(1977年6~7月)では農山村90%前後が、都市近郊75%が米飯で7%前後がパン、2%がめん類であった。

東京ではごはん40%、パン46%と大体半々でその他副食として卵、牛乳、肉、肉製品が多く用いられていた。夕食では朝食のように顕著な差はみられなかったが、両群共ごはんが多く、この他沖縄では中華めん、岩手では冷麦、そうめんが多く用いられていた。

b 主な日常食品の使用回数

第3表 調査期間中(連続3日間)の朝食、夕食に用いられた食品の使用回数

	沖 縄	岩 手
牛乳・乳製品	0.58	0.22
卵	0.62	0.49
魚・魚製品	0.53	0.59
肉・肉製品	0.88	0.52
計	2.61	1.82
大豆・大豆製品	0.91	1.31
その他の豆	0.02	0.29
計	0.93	1.60
緑黄色野菜	0.56	0.60
その他野菜・海藻	1.22	1.73
果 物	0.13	0.20
計	1.91	2.53

調査期間中における朝食及び夕食に用いられた食品1人当りの使用回数を見ると、魚、緑黄色野菜、果物では両群間に殆んど差異はみられなかったが、豆腐、豆類など植物性蛋白質の使用回数は岩手が多く、一方牛乳、卵、肉については沖縄が多かった。

④ 食事の栄養バランス
日常よく用いている食品をその主成分によって、A、B、C、Dの4つの群に分ち、4つの群の食品が全部揃っているれば、栄養のバランスのとれた食事であるとしている。沖縄と岩手について朝食が4群揃っているものは16%前後で両群同率であったが、夕食は沖縄が劣る上回りの群が劣るを下回ってやや劣る傾向を示した。また東京では栄養バランスのとれているもの朝食26%、夕食44%と岩手より更に高率であった。

今回は摂取量の記入は出来なかったので、栄養所要量との関係はみられない。

第4表 3日間におやつに用いられた食品と回数(%)

	果物	牛乳	アイスクリーム	ジュース	パン	ビスケット	クッキー	ヤクルト	ケーステラ	ヨーグルト	チョコレート	あめ	かき氷	せんべい	アゲイースキ	プリン	チョコレート	ポテトチップ
沖縄(101)	102	95	78	73	49	48	27	20	18	16	11	12	11	11	11	8	8	
岩手(99)	157	83	85	58	34	18	14	10	13	7	12	0	88	23	14	1.0	11	

3日間に子どもが食べたお八つの種類と回数

沖縄と岩手のお菓子

沖縄及び岩手の対象地では東京同様に菓子屋が多くまた同様の菓子類が並んでいた。沖縄特にH市はさとうきびの産地で黒さとうが多く、米粉に黒さとうをまぜういろ風にした「さとうパンピン」「こくもち」などの独特な菓子もあった。また27年間のアメリカ軍占領は沖縄の食生活を大きくかえ、菓子類もアメリカ風のキャンディ、チョコレート、ケーキ、ビスケット、高脂肪で安価なアイスクリームなどが豊富に販売されていた。

岩手県E市でも東京同様ケーキ、スナック、あめ、チョコレートなどが多く、また郷土名物の大福餅、まんじゅう、せんべいなどが沢山あった。子供の最も好む菓子類は沖縄ではチョコレート(62%)岩手・東京ではせんべい(52%)であった。

これらの菓子類が3日間に使われた種類と回数を第4表に示す。

沖縄・岩手両群共果物、牛乳、アイスクリーム、ジュース、パンなどが多く、菓子としては岩手ではせんべいが、沖縄ではビスケット、クッキーが多く用いられていた。また沖縄では食事が不規則で朝食或いは昼食代りに間食にうどん、そば、おにぎり、サンドイッチ、すし、お茶漬などが用いられていた。

④ 日常使用する食品に対する子供の「好き」「嫌い」について

一定の食品に対する子供の反応を「好き」「普通」「しぶしぶ食べる」「たべない」「のまない」の5項目にしばって質問した。

a. 牛乳・乳製品
牛乳・乳製品は「好き」と「普通」を合すると岩手、沖縄・東京の順に90、86、82%と受け入れられており、牛乳をのまない子どもは東京の10%が最も多かった。ヨーグルトと牛乳やフルーツ牛乳は80%近くの子どもに好まれており、与えたことのない母親は沖縄・岩手が15%前後、東京が7%であった。

チーズを好む子供は各群ともに殆程度で、殆ど同率であった。離島・農山村を問わず、乳製品の普及の目覚ま

しさに驚かされる。

b. 卵、魚、肉類

卵は90%の子どもに受け入れられており、「渋々食べる」ものは4%前後沖縄・東京両群にみられた。

豚肉は沖縄ではよく用いられ丸ごと購入して一族で調理加工保存して賞味する習慣がある。また牛肉はアメリカの特別処置品として比較的安価に供給されている。対象地の沖縄県H市は昔から漁港として栄え、現在はいえ、もずくの養殖も盛かんなので日常新鮮な魚を口にすることができる。

肉類に対する子どもの好みは沖縄42、岩手55、東京66%に好まれており、魚は同様の順で78、40、40%となっている。沖縄の子どもに魚ずきが多いのはH市の特殊性かも知れない。

c. 豆腐
豆腐は沖縄・岩手共によく用いられ、特に沖縄の郷土料理として「にがうり」と共に料理した「ゴーヤチャンプル」は有名である。

豆腐は沖縄・岩手両群の90%の対象児に好まれているのに対し東京では好む子どもは25%程度、「しぶしぶ食べる」が同率25%であった。

d. 野菜類

沖縄では冬瓜、南瓜、西瓜、へちま、にが瓜など瓜類が多く生産されている。特ににが瓜は沖縄特産の野菜でゴーヤともいい、ビタミンCが多く、夏まけに効果があるとして賞用されている。苦味が強いので子供はあまり好きない。

岩手県E市は東北の野菜処として各種野菜が栽培され子ども達にも比較的よく受け入れられている(71%)、沖縄・東京は60%前後でやや低い。

野菜を「嫌い」な子供は岩手27%、沖縄42%となっていた。にんじんは「好き」な子ども「嫌い」な子どもの双方が多く、特に東京に好まれていた。

この他キャベツ、きゅうり、レタス、玉葱、大根が好まれ、ピーマン、ねぎが嫌われていた。

e. インスタント食品

インスタント食品は日本の隅々に迄進出しているが、対象児の家庭ではどの程度利用しているであろうか。

回数に無記入が多かったので、やや正確性を欠くが、インスタントカップめん、ごはんもの、カレーなどは殆んどどの家庭が使用し、対象の半数近くの家庭では1週2～3回程度与えていた。またそうざい、冷凍コロッケ、フライ、グラタンなどもよく用いられ、全対象の半～半の子どもに与えられており、3群間に著るしい地域差はみられなかった。

ジュース類は各地域の80%前後の子供に愛飲され、毎日1～2回飲んでいるものが沖縄、岩手で半程度、3日に1～2回が40%程度であった。東京の飲用率は低い。

サイダーは岩手に、カルピスは東京によく飲用され、コーラーは3群共大体同率で60%程度であった。

⑥ 食品の購入 これらの日常食品は大部分がスーパー又は近所の店で求められており、岩手・東京はスーパーが半数以上、沖縄では近くの店が半数以上を占めていた。

東京では乳・卵など生協からの購入がみられたが、対象地区の特殊事情かも知れない。

⑦ 岩手における血色素量10.9g/dl以下のものと正常群との食生活の比較

岩手に於ては血色素量10.9g/dl以下の子どもが25名(22.9%)もいるので、その子供らを対象に更に食生活が血色素量に及ぼす影響を観察してみた。

血液正常群の母親に「まず健康、栄養面を考えて食事をつくる」ものの比率が高く、かつ動物性食品の使用回数が高いことがあげられる。

偏食、小食等の食生活上の問題点を有するものの比率が正常群より低くかった。

更に貧血群について幼稚園児と保育所園児について分類すると、貧血児は幼稚園児の38%、保育園児の17%で、明らかに幼稚園児が高率であった。恐らく保育所給食の効果であろうと考えるが更に詳細に追求してゆく予定である。

5) まとめ

われわれは沖縄、岩手、東京3地域の3歳児の食生活実態調査を実施し以下のことが明かになった。

① 1歳対象児の3ヵ月未満時における母乳栄養の比率は全国平均値(1977年)を沖縄は5%程度上回り、岩手は5%程度下回っていた、東京は略年平均値で37%を示した。

② 血色素量が10.9g/dl以下の幼児が沖縄では3名(3%)、岩手では25名(22.9%)で、有意に岩手が高

かった。東京ではすべてが11g/dl以上、平均13.9±1で優秀な成績であつたが採血に応じてくれた家庭が少なく11例にすぎなかつたので、今回は対象群から除外した。

③ 栄養、健康の面から食事づくりを考える母親は沖縄が岩手より有意に高く、岩手は「家族の好むもの」又は「手数のかからぬもの」を考えてつくる母親が多かつた。

④ 3日間の園児の食事記録より沖縄と岩手の食生活を比較すると次のようである。

a. 朝・夕食に用いた食品1人当りの使用回数は魚、緑黄色野菜、果物などは両群の間に殆ど差異はみられなかつたが、豆及び豆製品など植物性蛋白質の使用回数は1群が多く、牛乳、卵、肉については沖縄が多かつた。
b. 食事の栄養バランスは朝食は両群ほぼ同率であつたが、夕食は岩手が劣る傾向を示した。

c. 沖縄では「しぼしぼ朝抜きする」ものが岩手より多かつたが、間食におすし、サンドイッチ、うどん、そばなど軽食をとっているものが多かつた。朝抜きというより食事時間のずれとして取扱うのが適当かも知れない。

d. 食生活上の問題があるものは岩手に多く、沖縄には少なかつた。

e. 岩手における血色素量10.9g/dl以下群と正常群との比較
f. 岩手には血色素量10.9g/dl以下のものが多いので、食生活が血色素量に及ぼす影響を観察した処、沖縄と岩手にみられた母親の栄養、食料に対する関心度、使用する食品の種類や回数、食生活上のトラブルの有無などの差異が、正常群と貧血群の間にも同様に観察された。

また保育園児に比し、幼稚園児では貧血群が2倍以上みられたが、恐らく昼食のお弁当と給食の差異からもたらされるものではないかと考察される。更に詳細に追求していく予定である。

⑤ 日常使用する食品に対する子供の「好き、嫌い」について

牛乳、卵は80%以上の子供にうけ入れられており、肉類は東京に、魚類は沖縄に70%前後好かれていた。豆腐は沖縄、岩手の90%子供に好まれていたが、東京では25%程度が好み、「しぼしぼたべる」が25%で同率であつた。

野菜類は各地区とも半数以上に受入れられていた。比較的好きな子供は岩手に、嫌いな子供は東京が多かつた。キャベツ、きゅうり、レタス、玉葱、大根が比較的好まれ、ピーマン、ねぎを嫌がる子供が多かつた。

① 大参は好きな子供も、嫌いな子供も多かった。

② インスタント食品とジュース類

各地区共インスタント食品の中、カレー、カップめん、ごはんものは殆どの家庭で利用しており、そうざいものも約半数〜半の家庭が用いていた。

③ ジュース類は各地域の80%前後の子供に愛飲されており、特に沖縄・岩手に多かった。

サイダーは岩手に、カルピスは東京に、コーラーは3群共大体同率で60%程度であった。

④ 食品の購入

これら日常食品は大部分がスーパー又は近所の店で求められており、岩手・東京ではスーパーが、沖縄では近くの店での購入が半数以上であった。

以上の調査結果により、対象児の食生活に若干の差異が観察され、この相異が幼児の血液性状に影響を及ぼしている可能性が示唆された。

3. 母親の養育態度と児童の生活の実態

1) 家庭環境

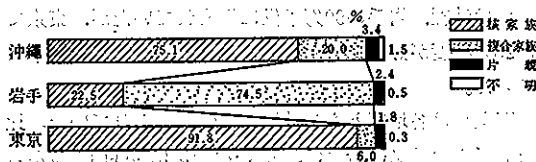
(1) 家族構成

① 家族形態 家族について、a 核家族、b 祖父母と同居、c その他の複合家族、d 片親家族に分けてみる。第17表は家族構成を地域別に比較したものである。なお、複合家族を祖父母と同居、その他に分けずに表示すると第1図になる。ここで明らかなように岩手は複合家族74.5% (内祖父母同居67.2%) と高率であり、他の2地区と比べて特徴的である。核家族は東京が91.8%と最も多く、沖縄は75.1%、岩手は22.5%である。

第17表 家族形態

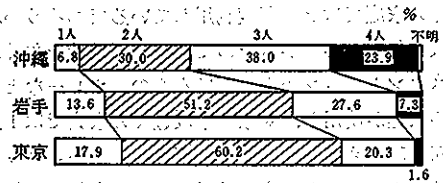
家族形態	核家族	複 合		片親	不明	計
		祖父母同居	その他			
沖 縄	308 (75.1)	64 (15.6)	18 (4.4)	14 (3.4)	6 (1.5)	410 (100.0)
岩 手	83 (22.5)	248 (67.2)	27 (7.3)	9 (2.4)	2 (0.5)	369 (100.0)
東 京	348 (91.8)	21 (5.5)	2 (0.5)	7 (1.8)	1 (0.3)	379 (100.0)
計	739 (63.8)	333 (28.8)	47 (4.1)	30 (2.6)	9 (0.8)	1,158 (100.0)

第1図



② 子ども数 子ども数を地域別にみると第2図のように、ひとりっ子は東京(17.9%)、岩手(13.6%)、

第2図 子どもの数



沖縄(6.8%)の順であり、子ども数4人は逆に沖縄(23.9%)、岩手(7.3%)、東京(1.6%)になる。東京と岩手は子ども数2人がもっとも多い割合を示すが沖縄は3人がもっとも多い。沖縄地区は子ども数3人以上が62%になっており、他の地区と比べて子ども数が多いといえる。なお、子どもの数の平均人数をみるとつぎのようになる。

沖縄 2.8人 岩手 2.3人 東京 2.1人

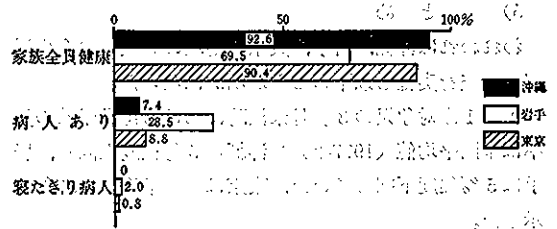
③ 育児担当者 育児を主に担当している者についてみた結果が第18表である。沖縄と東京では母親が育児を担当しているのが90%であるが、岩手地区では37%が祖母の育児担当となっている。これは家族形態と関連しているといえる。

第18表 育児の担当者

	両親	母親	父親	祖母(曾祖母)	その他の家族	無答	計
沖 縄	3.9%	90.0	0.7	6.8	1.7	1.7	100.0(410人)
岩 手	3.3	69.6	0.3	37.1	2.7	0.8	100.0(369人)
東 京	6.5	91.4	1.1	—	—	1.1	100.0(379人)

④ 家族の健康 家族が健康であるか、病気の人がいるか、寝たきりの病人がいるかについて調べた。第3図に示す通り、沖縄と東京は90%のものが家族揃って健康であるのに対し、岩手では70%弱になり、病気をもつものが30%強(内寝たきり病人2%)と高率である。祖父母と同居家族が多いことに関連した結果といえよう。沖縄と東京では、沖縄がより健康度が高いといえる。

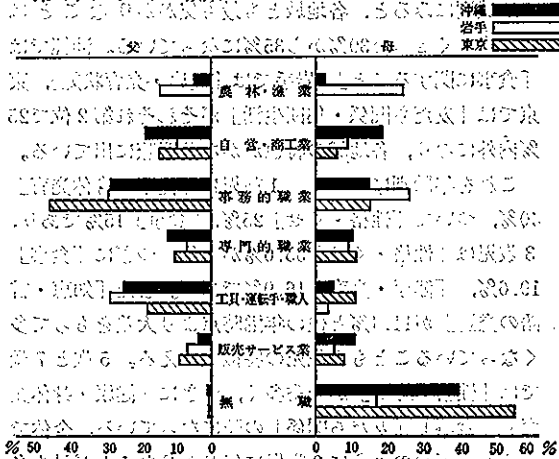
第3図 家族の健康



② 親の職業 父親の職業、母親の職業に分けて、それぞれ農林・漁

業、自営・商工業、事務職、専門職、工員・運転手・職人、販売・サービスの6種別に集計した。その結果は第4図である。父親の職業をみると、全般に事務的職業が多く、東京、沖縄は1位、岩手は2位である。東京は45.6%、沖縄28.0%、岩手28.5%で東京は他の2地区の1.6倍になっており、事務的職業が半ば近くを占めている。つぎに多い職業は工員・運転手・職人であり、岩手と沖縄では、事務職と近似の%を占めている。農林・漁業は岩手が14.1%、沖縄が4.4%、東京0であり、これに比し自営・商工業が岩手は沖縄の半数になっており、沖縄平良市と岩手の江刺市の地域差がみられる。

第4図 父母の職業



母親の職業については、職業をもたないものが東京56%、沖縄40%、岩手17%で各地域の差が明らかである。職種別にみると、専門職は各地域とも10%前後、沖縄は自営・商工業が2割近くで、岩手の2倍強、東京の3倍強である。岩手は農林・漁業と事務職で半数を占め、工員・職人も他の二地区より多くその特徴を示している。つまり、岩手の河刺市は農業地区であり、近年誘遷された工場の事務、工員として職業についている。

2) 母親の養育態度

(1) しつけ・養育の実態

① しつけの中心になる人；子どものしつけについて誰の意見が中心であるかをたずねた。その結果はつぎのようである。

	父親 (%)	母親 (%)	両親 (%)	祖父母 (%)	計 (%)	人数
沖縄	12.9	38.4	48.0	0.8	100.0	(396人)
岩手	11.6	37.4	45.5	4.4	100.0	(361人)
東京	7.7	42.7	49.3	0.3	100.0	(375人)

ここでみるように、各地域とも両親で話し合うというのが最も多く45~49%を占めており、ついで母親(36

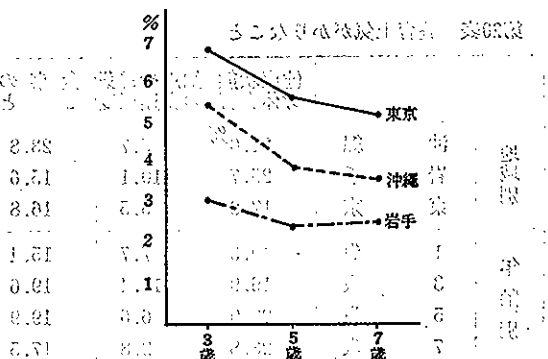
~42%)、父親の意見が中心になるものは7~12%である。東京は他地域より母親の意見が多く、父親の意見が少なくなっている。岩手では東京・沖縄に比べ両親で話しあうがやや少なく、それだけ祖父母の意見に移行している。また、祖父母同居家族だけについて祖父母中心のものをみると、沖縄1.6%、岩手5.7%、東京0であり、祖父母と同居家族の多い岩手でも、祖父母がしつけの中心になるのはごく少数であるといえる。

② しつけのタイプ；第6図に示す1)~8)の場面で母親がどのような態度をとるかを、a 体罰を与える、b 強く叱る、c 言い聞かせる、d 放っておく、e 無視する、f 子どもの言い分をきいて応じてやる、g まだそういう経験はない、の選択肢からそれぞれについてチェックしてもらった。この結果を、各場面の合計から地域差をみると第19表のようになる。なおfの経験したことがないものと不明回答を除いた。各地域とも「言い聞かせる」という答が多く46%前後であり、現実とは異なるかも知れないが母親の立てまえとしての意識がうかがわれる。つぎに多いのは「強く叱る」(27%前後)、そのあと「放っておく、無視」(14%前後)、「言い分を聞いてやる」(8%前後)、「体罰」(5%前後)となり、全体の順位は各地域の差がみられない。しかし、「体罰」と「強く叱る」を合計してみると、東京35.1%、沖縄が31.7%、岩手28.8%となり、逆に「放っておく」と「言い分を聞いてやる」

第19表 養育態度

	体罰を与える	強く叱る	言い聞かせる	放っておく無視する	言い分に応じてやる	計
沖縄	5.2%	26.5	47.0	12.0	9.3	100.0 (2,703人)
岩手	3.1	25.7	46.9	15.0	9.3	100.0 (2,454人)
東京	6.4	28.7	44.4	13.6	6.9	100.0 (2,574人)

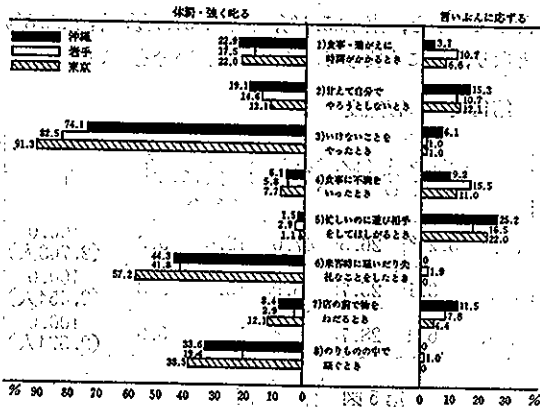
第5図 体罰



の合計は、岩手24.3%、沖縄21.3%、東京20.5%であり、東京はしつけにきびしく、岩手はしつけが甘く、沖縄がその中間にあるという結果になっている。さらに、「体罰」だけについてみると、この傾向は一層明らかになる。つぎの図は「体罰」の割合を1歳児を除き年齢別に比較したものである。どの地域も3歳児が体罰が多く、沖縄と東京は年齢が高くなるに従い体罰が減少している。岩手は5歳児と7歳児はほぼ同じである。

しつけの態度はしつける場面と年齢によって異なる。つぎに3歳児について各場面ごとに検討してみる。(第6図)。「言いきかせる」「放っておく、無視する」を除き、厳しく叱ることと甘い扱いの両極について地域差をみた。強く叱る場面は「いけないことをしたとき」が各地域とも1位になっており、つぎが「来客時に騒ぐ」「乗り物の中で騒ぐ」「食事、着がえに時間がかかる」「自分でできることをしない」の順になり、これも地域差がみられない。子どもの言い分に応ずるのは「忙しいのに遊び相手になってほしいが」が各地域とも1位ではあるが、東京・沖縄に比べ岩手は3分の2である。そして岩手では「食事に不満をいう」「食事、着がえに時間がか

第6図 しつけの態度



る」「甘えて自分でしない」などでも同じように子どもの言い分に応じている。つまり、岩手では母親が多忙なためか遊び相手になることは少なく、子どもの生活面では子どもの言い分になっているものが多いといえる。また、沖縄では「いけないことをしたとき」「店の前で物をねだる時」が他の地域より子どもの言い分を通すことが多いのが特徴的である。

③養育上気がかりなこと；子どもの養育上現在気になることを第20表の6項目に分けて調べた。すなわち、「健康状態・身体発育」「知恵・言語の発達」「食事のこと」「性格・くせ」「友だち関係・集団生活」「家族関係」についてである。

地域別にみると、各地域とも最も気がかりなことは「性格・くせ」で30%から35%になっている。沖縄では「食事に関すること」、岩手では「健康・発育状態」、東京では「友だち関係・集団生活」がそれぞれ第2位で25%内外になり、各地域の特徴がかなり明瞭に出ている。

これを年齢別にみると、1歳児は「健康・身体発育」40%、ついで「性格・くせ」25%、「食事」15%であり、3歳児は「性格・くせ」35.6%が1位、つぎに「食事」19.6%、「健康・発育」16.9%である。また、「知恵・言語の発達」が11.4%と他の年齢時点より大差をもって多くなっていることも3歳児の特徴といえる。5歳と7歳では「性格・くせ」が一番多く、つぎに「健康・身体発育」「食事」「友だち関係」の順になっている。全体でみると、下記のように3歳児に気がかりなことが最も多く扱いにくい年齢であることを示している。なお、最も問題の少ないのは1歳児になっている。

養育上気がかりなことがある

年齢	1歳児 (%)	3歳児 (%)	5歳児 (%)	7歳児 (%)
気がかりなこと	35.9%	53.8%	44.7%	40.4%

(2) 子ども像・子どもへの期待

①理想とする子ども像；「どんな子どもに育てたいか」の設問によって、母親の理想とする子ども像をさぐって

第20表 養育上気がかりなこと

		健康状態 身体発育	知恵や言葉 の発達程度	食事の こと	性格・くせ	友達関係 集団生活	家族関係	計
地域別	沖縄	21.0%	5.7	23.8	35.2	10.5	3.8	100.0 (210人)
	岩手	25.7	10.1	15.6	33.9	10.6	4.1	100.0 (218人)
	東京	17.8	6.5	16.8	30.8	25.4	2.7	100.0 (185人)
年齢別	1歳	40.3	7.7	15.4	25.0	5.8	5.8	100.0 (52人)
	3歳	16.9	11.4	19.6	35.6	13.8	2.7	100.0 (219人)
	5歳	20.9	6.6	19.9	30.6	18.9	3.1	100.0 (196人)
	7歳	23.8	2.8	17.5	37.7	15.4	2.8	100.0 (143人)

第21表 どんな子に育てたいか(5位まで)

		元気で のびのび した子	思いやり のある子	責任感の ある子	自立した しっかり した子	自分の意 見を主張 できる子	素直で 言うこと を聞く子	人 数
地域別	沖縄	① 44.6%	② 19.3	③ 8.5	④ 7.0	⑤ 6.8		399人
	岩手	① 46.7%	② 18.1	④ 5.6	③ 7.8	④ 5.6		360人
	東京	① 43.9%	② 14.0	④ 8.6	③ 10.8	⑥ 7.3		371人
性別	男	① 48.4%	② 14.5	③ 8.0	④ 6.7	⑤ 5.7		566人
	女	① 42.5%	② 20.3	④ 7.4	③ 8.2	⑥ 6.4		551人
母の職業	なし	① 42.2%	② 18.4	③ 10.2	④ 9.6		⑥ 4.8	354人
	あり	① 47.3%	② 18.2	④ 5.7	③ 7.6	⑥ 5.4	⑥ 5.4	408人
母の学歴	中学卒	① 43.0%	② 17.9	③ 10.3		④ 7.2	⑥ 6.3	223人
	高校卒	① 41.3%	② 18.9	③ 8.4	④ 8.0	⑤ 5.5		475人
	短大卒以上	① 49.1%	③ 16.5	④ 5.2	③ 11.8	④ 5.2		212人

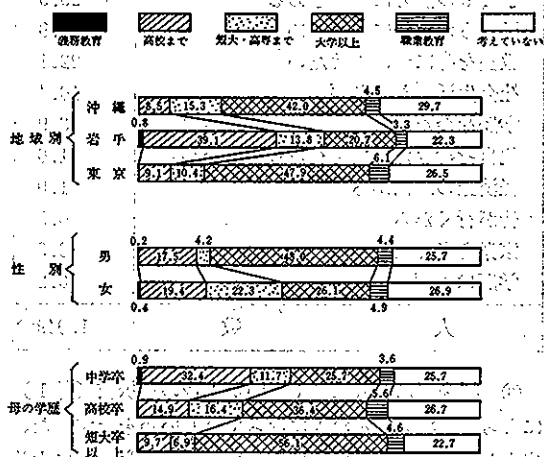
みた。地域別にみると第21表のように各地域とも45%内外が「元気で のびのびした子」を望み1位になっている。2位も各地域同じで「思いやりのある子」(20%弱)である。3位以下は分散しているが東京(10.8%)、岩手(7.8%)では「自立した子」が3位、沖縄は「責任感のある子」が3位(8.5%)である。東京では「責任感のある子」は4位であるが8.6%で沖縄より多い。東京は他地域と比べて「自立した子」を望むものが多く、「思いやりのある子」「素直で言うことを聞く子」の割合が少ない。

つぎに子どもの性別による差を検討してみる。男女とも「元気で のびのびした子」が最も多く、2位が「思いやりのある子」である。そのあと男子には「責任感のある子」「自立した子」「自分の意見を主張できる子」の順に望んでおり、女子は「自立」「責任感」「自己主張」の順になっている。僅かに3位と4位の順が入れ替わっているだけで、子ども像としての性差はみられないといっ

てよいであろう。子ども像について母親の学歴別にみても。母親の学歴を中学卒、高校卒、短大卒以上の三段階に分けてみたが、いずれも「元気で のびのびした子」が40%台で1位、「思いやりのある子」20%弱で2位、そのあと「責任感のある子」「自立した子」「自分の意見を主張できる子」「素直な子」など若干順位は入れ替わってあげられている。学歴順にみられるものは「自立した子」が高学歴ほど高くなり、「責任感のある子」「素直な子」は逆に低くなっている。短大卒以上では「素直で言うことを聞く子」を望むものはいなかった。

②受けさせたい教育の程度；子どもにどの程度の教育を受けさせたいかを、中学、高校、短大、専門、大学、

第7図 子どもに受けさせたい教育程度



大学以上、職業教育の分類でたずねた。「わからない」と無回答をあわせ各地域5%内外あったがこれを除いた数を100として各項の割合をみた。(第7図)

地域別にみると、東京、沖縄、岩手の順に高い教育を受けさせたいと思っていることが明らかである。岩手は高校までを望むものが39%であるが、他の二地域は10%に満たない。これにひきかえ大学・大学以上を望むものは東京48%、沖縄42%、岩手21%である。また、各地域とも「まだ考えていない」回答が22~30%あった、中学までは全体で3名である。

男女別に比較すると、男子は大学・大学院以上を望むものが48%を占めており、女子は26.1%になっており、男子に高学歴を希望する母親が多いことが明らかである。短大までを望むものは女子22.3%、男子4.2%で、

大差がみられる。高校までと短大以上に大きく分ければ男女ほぼ同じで性差はみられない。

母親の学歴別に子どもへの教育をみると、中学卒は、子どもに受けさせたい学歴として高校までが32%、短大11.7%、大学25.7%で高校までが一番多く、高校卒の母は大学・大学以上を望むもの36.4%、大学卒の母は56.1%と母の学歴が高いほど子どもへ望む学歴が高くなっている。

教育を受けさせる理由としては、地域別、男女別、母の学歴別にみて、「本人の能力」「本人の希望」「教養を身につける」が上位3位で大差はない。地域別の東京、性別の女子が「本人の能力」より「本人の希望」が1位になっており、学歴別の大学卒の母が「教養を身につける」を1位としているのが特徴的である。

第22表 教育を受けさせたい理由

子どもの能力によりきめる	29.9%
子どもの希望によりきめる	29.9
教養を身につけさせたい	22.1
社会生活のため必要	10.4
学歴社会だから	3.9
親自身行きたくても行けなかったから	1.6
経済上の理由から	1.0
皆が行くから	0.5
家業を考えて	0.5
学歴は不要	0.2
人 数	1,049人

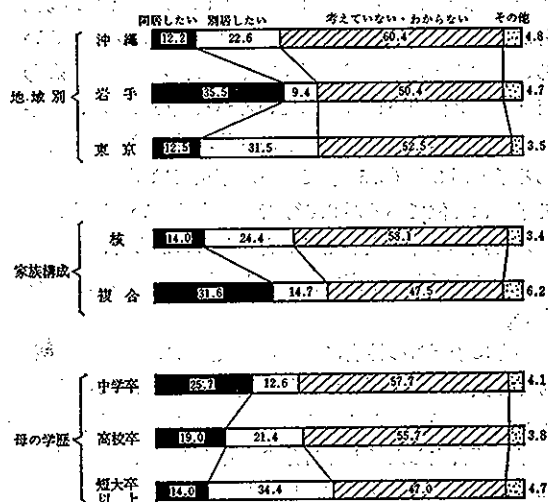
③ 将来どんな人に育てたいか；12の選択肢（付1）によって、将来どんな人になってほしいかをたずねた。集中している人間像は地域別、性別、母の学歴別に大差

第23表 将来どんな人になってほしいか（5位まで）

		人間味のある人	家族に思いやりのある人	自分の才能を生かせる人	平凡な人	自活できる人	知識・経験の豊富な人	社会のためにつくす人	人 数
地域別	沖縄	① 27.6%	② 18.0	③ 16.6	④ 7.1	⑤ 5.9			410人
	岩手	① 19.8%	④ 15.5	③ 18.7	⑤ 6.2	① 19.8			369人
	東京	① 26.1%	④ 9.5	② 25.9	⑤ 5.3	③ 13.7			379人
性別	男	① 25.9%	③ 13.5	② 22.0		④ 10.3		⑥ 4.8	582人
	女	① 23.3%	④ 15.3	② 18.6	⑤ 8.5	③ 15.5			576人
母の職業	なし	① 22.8%	③ 16.4	② 18.1	⑤ 7.2	④ 12.5			360人
	あり	① 27.2%	④ 11.6	② 22.7	⑥ 6.0	③ 12.3			415人
母の学歴	中学卒	③ 17.1%	① 21.0	② 18.4	⑥ 9.6	④ 11.0			228人
	高校卒	① 28.3%	④ 13.1	② 22.2	⑥ 4.9	③ 13.3			487人
	短大卒以上	① 30.0%	⑤ 4.2	② 24.0		③ 17.1	④ 6.5		217人

はなく、多少順位が入れ替る程度であり、他の項目は0.2%~2%で分散している。地域別にみると、各地域とも「人間味のある人」が第1位であるが、東京ではこれと同じくらい「自分の才能を生かせる人」をあげ、「家族に思いやりのある人」が他地域より少ないのが特徴的である。性別ではほとんど男女差はないが、「自活できる人」が男より女の子に多いことが目立っている。男子の自活は当然と考えられているからであろう。母の学歴別にみると、中学卒の場合、「家庭を大切に、家族に思いやりのある人」が第1位になり、「人間味のある人」が3位になって、高校、大学卒の母親と明らかな差をみせている。大学卒の場合は「家族に思いやり」より「知識・経験の豊かな人」が上位になり、他群との差を示している。（第23表）

第8図 子どもとの同居希望



④将来子どもとの同居について：将来、子どもが成人したあと同居を希望するかについて調べた(第8図)。調査対象が1歳から7歳の子どものため、現実感がなく「まだ考えていない」が約42%、「わからない」が約10%で半数以上を占めている。地域別、家族形態別、母の学歴別に比較してみると、地域別では「同居したい」ものが岩手に多く、「別居したい」ものが東京に多くなっている。家族形態別では核家族のものが「別居」を、複合家族のものが同居を多く望んでいる。なお、核家族でも母子家庭のものは数は少ないが、「別居」を望むもの3人に対し、「同居」は6人と倍になっている。母の学歴では図に示すように、低学歴のものほど同居を希望している。

3) 子どもの生活

(1) 遊び場

子どもの生活空間を「遊び場」で取り上げてみた。自宅の近所に「広い遊び場がある」「せまい遊び場がある」「遊び場がない」の三分類で地域差をみるとつぎのようになっている。

	広い遊び場	せまい遊び場	遊び場なし	計
沖縄	28.2%	33.1%	38.7%	100.0%(387人)
岩手	37.4%	24.6%	38.0%	100.0%(342人)
東京	70.5%	25.3%	4.2%	100.0%(376人)

以上のように東京が自宅近くに広い遊び場があるという答えが70%と多くなっており、他地域の倍になる。また遊び場なしに至っては、他地域40%弱であるのに対し、東京は僅かに4%である。これは、東京地区が団地対象であったため、遊び場が確保されていることが考えられる。一方、「遊び場」を子どもの遊ぶ場所と考えず、ブランコやすべり台などの遊具を備えたいいわゆる遊園地を想定したため、沖縄、岩手に遊び場が少なくなっているのであろう。

(2) 子どもの生活時間

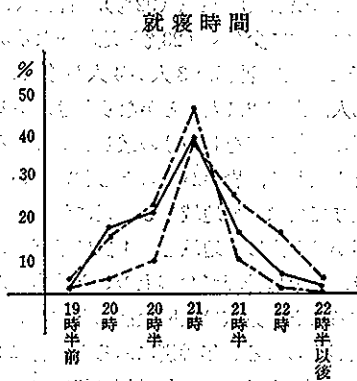
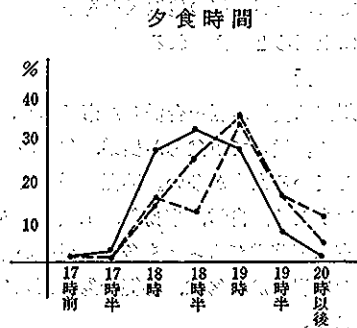
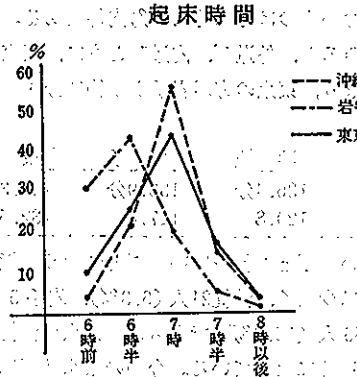
子どもがどのような生活をしているか、時間的に一日の生活を記入してもらった。これによって地域的な生活の差を中心に検討してみる。

①起床時間・就寝時間・夕食時間

起床、就寝、夕食それぞれの時間について地域的な分布差をみたものが第9図である。

起床時間は岩手が一番早く、90%の子が7時前に起床している。沖縄と東京は類似し7時頃起床する子が多とも多い。就寝時間を見ると、岩手が多とも早く、9時までに90%の子が就寝している。これに対し東京は、76.2%、沖縄51%であり、沖縄の子どもの多とも就寝

第9図 子どもの生活時間



時間がおそくなっている。

夕食時間は東京が午後6時半中心に集中し他地域より夕食時間が早くなっている。6時半までに夕食をするものは東京61.5%、岩手49.9%、沖縄28.8%であり、沖縄の夕食時間が遅い時間に偏っている。東京は給料生活者が殆んどであり、夕食時間が一定して早いと考えられる。

②外遊びと内遊び；外遊び、内遊びをそれぞれ1時間未満、1時間から1時間ごとに5時間以上までと遊び時間なしに分けて、子どもの遊び時間をみた。外遊び、内遊び、どちらも1～3時間に集中しており(60%内外)

各地域の遊び時間の大きな差はみられない。外遊び、内遊びの全くないものはそれぞれ5%内外である。これを平均時間でみると、外遊び、内遊びともに、東京、沖縄、岩手の順になり、東京の方が岩手より約10分ずつ多くなっている。

	沖 縄	岩 手	東 京
外遊び	136.4分	133.9分	143.3分
内遊び	120.8	117.4	132.5

③塾・けいこごと；塾やけいこごとに通う実態をみたが、その数は少なく、沖縄21人(6.3%)；岩手5人(1.6%)、東京56人(15.3%)であった。東京が沖縄の倍、岩手の10倍近くになっている。今回の東京地区は下町と郊外の団地であったが、都の他地区を対象とすれば、この数はさらに上回ると考えられる。

4) 小 括

岩手の江刺市は農村地区を合併した市であり、誘置工場を数多くもつ。従って祖父母が農業、父母が工員・事務職に従事している家庭が多い。沖縄の平良市は離島で農業従事者は少なく、自営、事務職、工員・職人と三分される。東京は事務職がもっとも多い。母親が職業に従事しているのは岩手が80%強、沖縄60%、東京40%と地域差がみられた。

家族形態では核家族が東京(92%)、沖縄(75%)に対し、岩手は非常に少なく(23%)地域的な差が明らかである。子ども数は沖縄が3人か4人が多く、他地域(岩手2.3人、東京2.1人)とかなり開きがある。

(2) 母親の養育態度をしつけの厳しさからみると、東京がもっとも厳しく、岩手がかんも甘いといえる。1歳から7歳までではどの地域も3歳児に体罰が多い。しつけ上気がかりな点は各地域とも1位は子どもの性格・くせであり、2位は沖縄が食事上のこと、岩手が健康・発育に関すること、東京は集団生活に関する事で、各地域の特徴がみられる。年齢別にみると、特に3歳児に気がかりな問題が多く、この年齢期の扱いにくさを示している。

(3) 母親がどんな子どもに育てたいか、その理想像をみると、1位が「元気で伸びのびした子」、つぎが「思いやりのある子」であり、地域別、男女別、母の学歴別、母の職業の有無別にみても同じであった。わが子に受けさせたい教育程度については、中学までのものは全調査対象者のうち、わずかに3名である。高校までとするものは岩手40%弱、沖縄、東京は10%にも満たず、高校以上をのぞむものが圧倒的に多い。男女差をみると、女子は短大と大学半々で、男子の大学の割合とほぼ同じになっている。高校までは男女差はみられない。また、母親

の学歴が高いほど子どもの高学歴をのぞんでいる。

つぎに、理想とする人間像——どんな人になってほしいか——をみると、「人間味のある人」「自分の才能を生かせる人」「家族に思いやりのある人」「自活できる人」が上位になるが、「人間味のある人」が地域、性、職業の有無にかかわらず1位である。

将来、わが子と同居をのぞむものは、岩手36%に対し沖縄と東京は12%であり、別居希望は東京32%、沖縄27%、岩手9%であり、岩手が同居希望のものが多い。また現在三世代家族のものが核家族のものより同居をのぞんでおり、母の学歴別では高学歴ほど別居を希望するものが多い。対象者が乳幼児・学童の母親であり、将来の同居・別居に対して切実感なく、半数近くが不明・まだきめかねるの回答であった。

(4) 子どもの生活をみると、起床時間は岩手がかんも早く6時半までが70%、沖縄・東京は7時に集中している。就寝時間は9時就寝がかんも多し。9時までに就寝するものが岩手90%、東京76%、沖縄51%で沖縄の子どもたちが遅くまで起きている。夕食は東京が6時半前後、岩手・沖縄は7時前後であり、俸給生活者が多く、職業をもたない母の多い東京の特徴がみられる。

子どもの遊び時間は地域差なく1~3時間であり、内遊び、外遊びは約半々であるが外遊びの方が10分程度多くなっている。東京が広い遊び場があるという回答が多いのに対し、沖縄・岩手はせまい遊び場もないと回答している。これは子どもの遊び場をいわゆる児童遊園ととらえられているからであろう。塾やけいこごとに通うものは、東京は沖縄の2倍、岩手の10倍であり各地域の差が明らかである。

4. 母親の就労と保育需要

1) 母親の就労と養育の実態

(1) 就労と養育

①母親の就労状況；さきに家庭環境のところで父母の職業について職種をみたが、ここでは母親の就労の状況をみる。東京は常勤は他の二地域の半数であるが、パート勤務、内職は逆に2~3倍になっている。岩手は家業従事が30%で農業地区の特徴を示している。(第24表)

第24表 母親の就労状況

	毎日勤めに 出ている	パート で勤め ている	家業を 手伝っ ている	家で内 職して いる	計
沖 縄	63.7%	6.2	22.8	7.3	100.0(259)人
岩 手	54.7	6.8	30.5	8.0	100.0(311)人
東 京	38.9	29.1	9.2	22.8	100.0(206)人

母親の就労状況を家族形態別に対比すると核家族より複合家族の母親が就労している割合が多い。(第25表)

第25表 家族形態別就労状況

	職業ある	職業ない	計
核家族	60.0%	40.0	100.0 (755)人
複合家族	85.0	15.0	100.0 (374)人

②就労中の子どもの生活

a 保育所と幼稚園

仕事をもつ母親が子どもをどこに預けているかをたずねた。3歳と5歳について、地域別にみると、つぎのようになる。

3歳児

	保育所		幼稚園		計
	%	%	%	%	
沖繩	86.1	13.9	100.0	100.0	(108)人
岩手	64.8	35.2	100.0	100.0	(91)人
東京	100.0	0	100.0	100.0	(51)人

5歳児

	保育所		幼稚園		計
	%	%	%	%	
沖繩	0	100.0	100.0	100.0	(58)人
岩手	55.4	44.6	100.0	100.0	(92)人
東京	74.4	25.6	100.0	100.0	(86)人

すなわち、沖繩では5歳児対象の保育所がないため、全員が幼稚園に行くことになっている。東京では核家族世帯のため短時間の幼稚園では仕事をもつことが不可能であり、保育所が増設され、保育所数が充足している地区であったともいえる。幼稚園に通う5歳児の母親は、後に述べる母親と子どもの帰宅時間にずれがないところから、母親が勤務時間の短い職についていると考えられる。岩手では3歳、5歳ともに幼稚園に通う子が40%内外になっているが、家業(農業)、パート勤務の母親が多く、さらに複合家族が大半を占めるので、幼稚園から帰宅後母か家族が子どもをみているといえる。

b 二重保育

母親の就労別に二重保育(保育所、幼稚園から帰宅後子どもを預けている)についてみると第26表のように全体で7.5%とその割合は少なくなっている。常勤のものももっとも多く11.7%、つぎに家業に従事するもの3.5%である。年齢別では1歳児、3歳児が8.5%、5歳児6.0%である。地域別では沖繩12.2%、東京5.5%、岩手4.4%と、沖繩が他地域より二重保育が多い。また家族形態別にみると、二重保育をしているものは核家族

第26表 二重保育

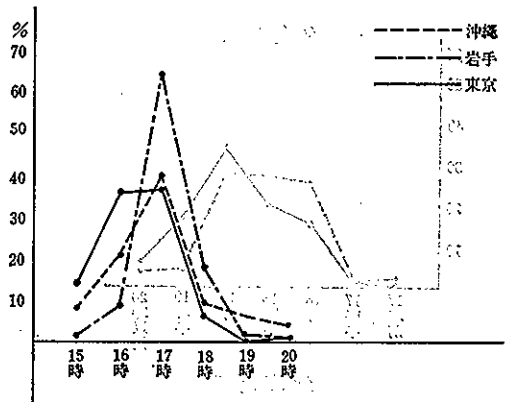
		預けている	預けていない	計
		7.5%	92.5%	(536)人
母の職業別	常勤	11.7	88.3	(290)人
	パートタイム	1.4	98.6	(73)人
	家業に従事	3.5	96.5	(115)人
	内職	1.8	98.2	(56)人
年齢別	1歳	8.5	91.5	(71)人
	3歳	8.5	91.5	(246)人
	5歳	6.0	94.0	(218)人
地域別	沖繩	12.2	87.8	(188)人
	岩手	4.4	95.6	(180)人
	東京	5.5	94.5	(168)人
家族構成	核家族	10.0	90.0	(350)人
	複合家族	2.7	97.3	(184)人

10.0%、複合家族2.7%である。

c 母親の帰宅時間

就労している母親の帰宅時間は東京・沖繩が午後4~6時に集中しているのに対し、岩手は5~6時が67%と帰宅時間が他地域よりおそくなっている。(第10図)

第10図 母親の帰宅時間

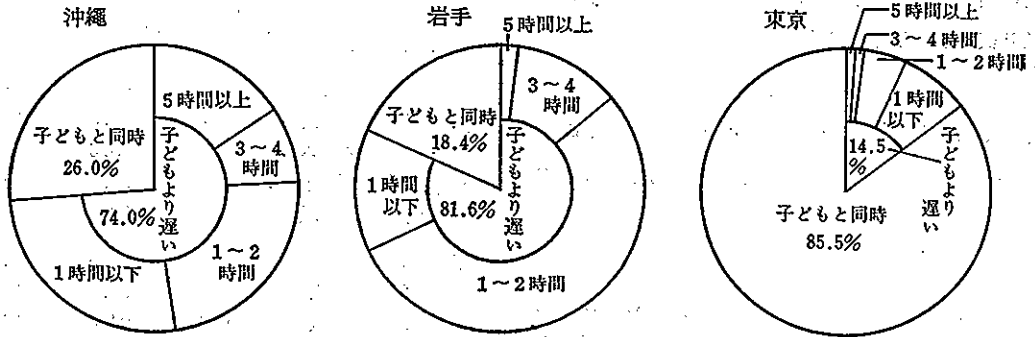


母親と子どもの帰宅時間のずれをみると、東京は大部分を占める85.5%が子どもより母親の帰宅が早いか同時刻となっている。沖繩・岩手はこの逆に子どもより帰宅時間の遅いものが80%内外になっている。東京は保育所に寄って子どもを連れ帰るものが多いこと、他地域は祖父母が子どもをみたり、短時間保育の幼稚園に通わせて就労していることが明らかである。

d 子どもの生活時間

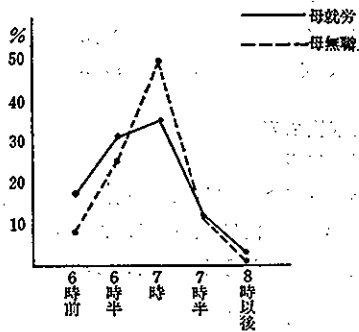
職業をもつ母親と職業のない母親とで子どもの生活時

第11図 母と子の帰宅時間の比較

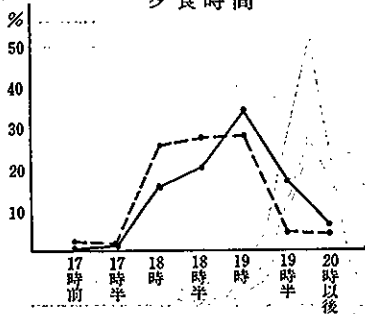


第12図 子どもの生活時間

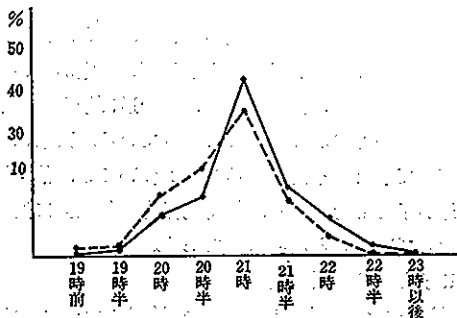
起床時間



夕食時間



就寝時間



間に差があるかどうかをみた(第12図)。母親が就労している場合、子どもの起床時間は6時半までに起きる子47.7%であるが、就労していない母親の子どもは33.6%である。就寝時間は仕事をもつ母親の子どもは8時半までに就寝するもの25.7%、仕事をもたない母親の子ども40.2%であり、かなり開きがみられる。9時半以後就寝するものは母親の就労家庭は27.6%で、無職の母の家庭18.6%であり、母の就労家庭の子は就寝時間が遅くなっている。夕食時間も一般の家庭が午後6時~7時(80%)が殆んどであり、6時半までのものは56%と半ば以上であるが、就労家庭では37%、7時半以後23%(一般家庭8%)と就労家庭が遅くなっている。つまり、母の就労家庭は子どもの生活時間は、起床が早く就寝が遅く睡眠時間が短くなり、夕食時間も遅いといえる。

e 食事・おやつの与え方

子どもの食事について、朝食をきちんと与えているかを、母親の就労の有無で比較をすると次のようになる。

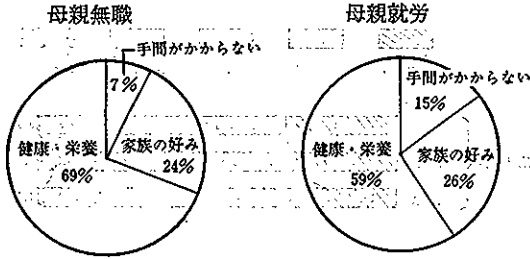
	三食きちんと与える	時どき朝食をぬく	朝食ぬきが多い	計
職業あり(常勤)	79.8%	16.8%	3.4%	100.0%(411人)
職業なし	86.5	11.8	1.7	100.0%(356人)

就労の母親の方が子どもの朝食をぬく頻数が多くなっている。朝食ぬきが多いものは職業のないものの2倍になる。しかし職業をもたない母親も、朝食をぬくことが13.5%と1割以上を占めていることがわかる。

食事を作る際心がけることでは第13図のように、母の就労の有無にかかわらず「健康・栄養を考える」が大半を占め、つぎに「家族の好み」になっている。「時間や手間がかからない」は就労の母親の方が職業のない母親の2倍になっているのが特徴的である。

子どもが食事上の問題をもつものを、職業の有無別に

第13図 調理の際心がけること



みると、つぎのようになる。

	問題ある	問題ない	無答	計
職業(常勤)	57.3%	39.0%	3.6%	100.0%(415人)
職業なし	47.2	48.3	4.4	100.0 (360人)

職業をもっている母親の方が子どもの食事上の問題をもつものが多い。二つ以上の問題をもつ子もいるが、問題全体の中でどのような問題が多いかをみよ。

	偏食	遊び食い	小食	むら食い	大食	計
職業(常勤)	29.8%	26.7%	23.6%	17.2%	2.7%	100.0(262)
職業なし	28.3	23.5	29.5	17.1	1.6	100.0(187)

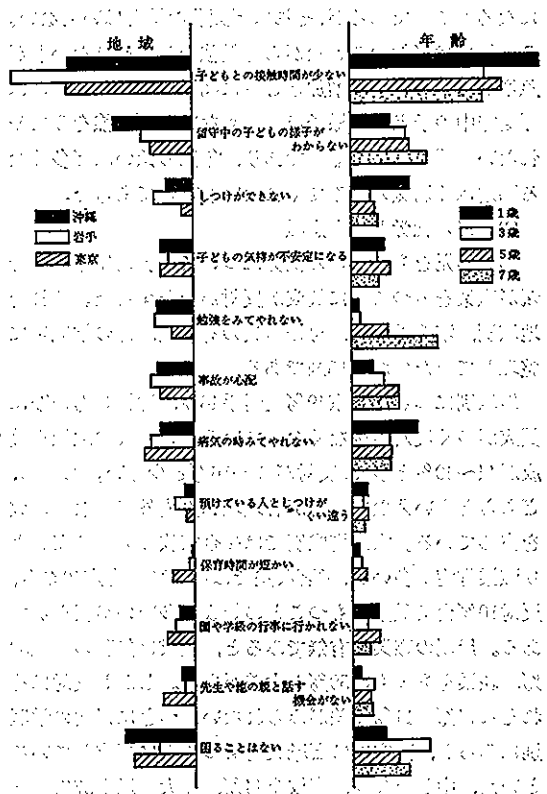
ここでみるように、有職者の方が問題数が多く、ひとりの子がいくつかの問題をもっていることがわかる。職業をもつ母親が「偏食」「遊び食い」「小食」の順の問題をもつのに対し、無職の母親は「小食」「偏食」「遊び食い」の順になっている。家庭にいる母親は干渉が多く食事でも食の細い子を問題にし、逆に母への愛情欲求が満たされない子に多い「大食」の問題が働く母親に多いことをみることができる。

つぎにおやつとの与え方についてみると、下記のように、職業をもち毎日出勤にかかわらず「母親が用意する」が大部分であるが、無職の母親よりその割合が10%少ない。また、職業をもつ母親の方が「子どもに自由にとり出させる」は無職の倍以上になっており、「子どもにおやつを買わせる」ものも多くなっている。

	母が用意する	子どもにとり出させる	子どもに買わせる
職業(常勤)	73.6%	16.2%	10.2%
職業なし	83.9	7.6	8.5

⑧就労のため困ること：就労しているため子どもの養育の上で困ること、心配なことについてたずねたが、これを地域別、子どもの年齢別に比較してみた(第14図)。まず、地域別にみよ。就労して子どもの養育に困ることないものは20%内外で沖縄、東京、岩手の順になっている。養育上困ることでもっとも多いのは各地域とも

第14図 仕事をもらっているために困ること、心配なこと



に「子どもとの接触時間が少ない」ことであり、岩手は約60%、東京、沖縄は40%である。つぎに多いものは沖縄、岩手が「留守中の子どもの様子がわからない」ことであり、東京は「病気の時みてやれない」になっている。岩手は祖父母同居家族の特徴が出ており、「しつけができない」「預けている人とのしつけの不一致」が他地域より多く、また、農作業への長時間就労が「子どもとの接触時間が少ない」という答えを多くしている。東京では核家族のため「子どもの病気の時」「保育時間が短い」ことが他地域より多く、この他「園や学校の行事への参加」「先生・他の親との話し合い」の少ないことを心配している親が多いのも特徴といえる。

就労と子どもの問題を年齢別に検討してみると、各年齢ともに、「子どもと接触時間が少ない」をもっとも大きな問題としているが、とくに1歳児は他の年齢より多く60%に達している。この他、1歳児に多いのは「病気の時みてやれない」21%、「しつけができない」19%であり、他の年齢の2倍近くになっている。3歳児は「困ることがない」ものが他の年齢より著しく多く、それぞれの問題についても困る率はおしなべて低い。5歳児が

他の年齢児より高い率のものは「子どもの気持が不安定になる」ことであるが、それほど顕著な差とはいえない。7歳児では当然のことながら「勉強をみてやれない」が急増している。年齢増加とともに問題が多くなるものは「留守中の子どもの様子がかめめない」「勉強をみてやれない」「事故の心配」であり、年齢の低いほど多くなる問題は「病気の時みてやれない」ことであった。

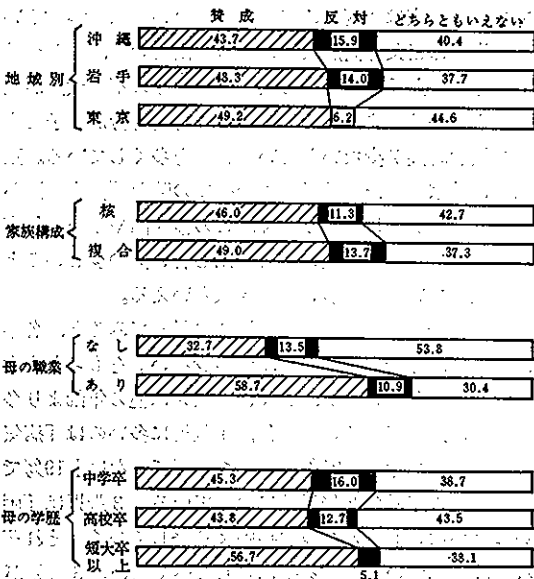
(2) 母の就労と養育意識

①乳幼児をもつ母親の就労について、乳幼児をもつ母親が職業をもつことに賛成か反対かをたずねた。これを地域別、家族構成別、母の職業の有無別、母の学歴別に整理してみたのが第15図である。

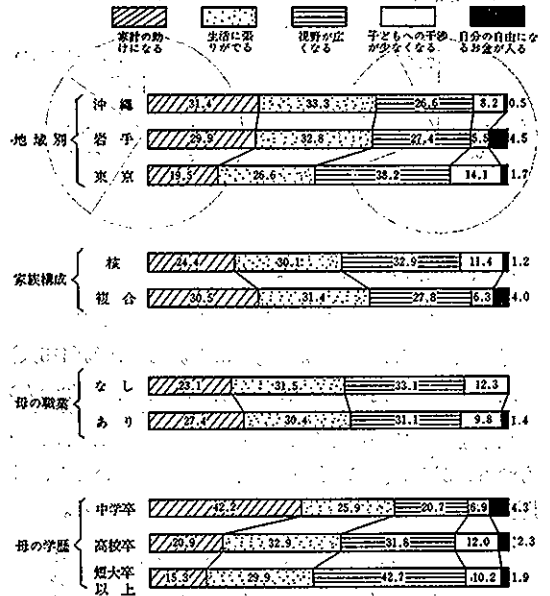
地域別にみると東京49%、岩手48%、沖縄44%の順に賛成が多く反対が少なくなっている。いずれの地域も賛成が44~49%と多く、反対が6~16%と少ない。しかし、どちらもいえない割合が各地域40%内外でかなりの数を占めている。家族構成別では複合家族の方が核家族より職業肯定が多いが、顕著な差ではなく職業肯定40%台、反対10%台で職業をもつことの賛成が多いのが明らかである。母親の職業の有無でみると、賛成は無職の母親33%、職業をもつもの59%と大差がある。しかし反対はそれぞれ14%、11%で差がみられない。つぎに母親の学歴別にみると、高学歴ほど職業をもつことに賛成しているといえ、中学卒45%、高校卒44%、短大卒以上57%である。

母親の就労賛成の理由は(第15図一(2))、地域別では

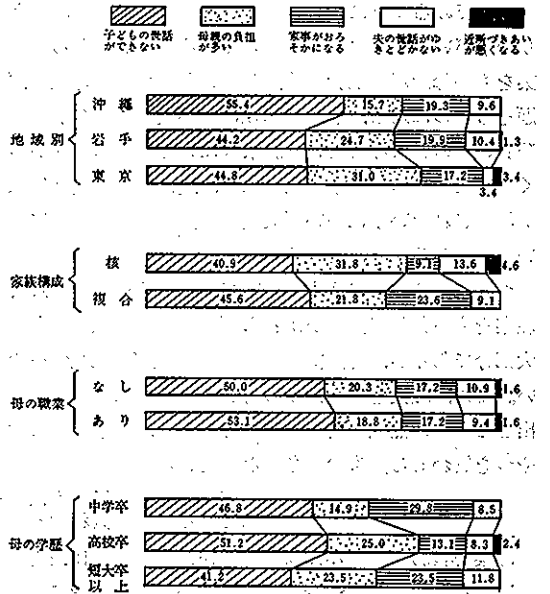
第15図一(1) 母親の就労の賛否



第15図一(2) 母親就労の賛成理由



第15図一(3) 母親就労の反対理由



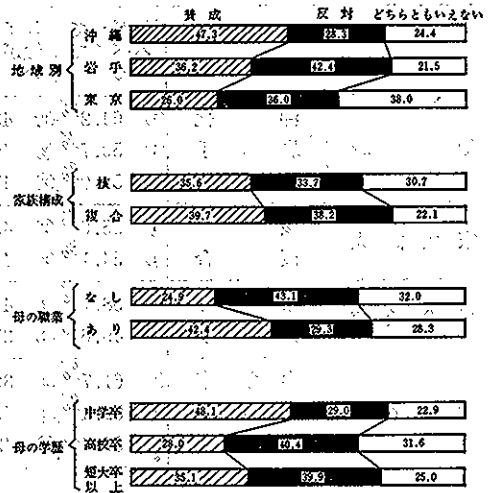
「家計の助け」「生活に張りができる」は、沖縄、岩手、東京の順であるが、「母の視野が広がる」「子どもに干渉しすぎない」は逆に東京、岩手、沖縄の順になっている。「自由になるお金が入る」は全体に少ないが、地域別には岩手が多く複合家族の特性を示す。沖縄より東京の方が高いのは購買市場の影響が考えられる。家族構

成別にみれば、核家族は「視野が広がる」「子どもへの干渉が少なくなる」が複合家族より多くなっている。職業の有無別では大差はみられず「視野が広がる」「生活の張り」「家計の助け」の順になっている。学歴別にみるとかなりの違いがみられ、中学卒が「家計の助け」が多く、高学歴では「視野が広がる」が多い。母親の就労を反対する理由は(第15図-⑧)「子どもの世話ができない」が圧倒的に多く、地域、家族構成、職業の有無、母の学歴にかかわらず半ばを占めている。「母親の負担が大きい」は地域では東京(31%)、岩手(25%)、沖縄(16%)の順になっており、家族構成では核家族、学歴別では高学歴のものが多くなっている。「家事がおろそかになる」については、地域差はなく、学歴別では中学卒、家族構成では複合家族に多くなっている。母が就労することの反対理由は、職業の有無別に違いはみられない。

③3歳未満児の保育所入所について；3歳以下の小さい子どもを保育所に預けることについて、賛成か反対かをたずねた。その結果は第16図のようになっている。地域別では賛成するものが沖縄、岩手、東京の順になり、反対が岩手に多い。核家族と複合家族と比較すると、複合家族の方が賛成反対ともにやや多くなり、どちらも反対より賛成が多い。母の職業の有無別では、明らかに有職者の方に賛成が多く、無職のものは反対が多くなっている。母の学歴別にみると、賛成は中学卒に多く、高校以上は賛成のものより反対のものが多い結果になっている。

小さい子どもを保育所に預けることの賛成の理由は、1. 規則的な生活、2. 学習(いろいろなことが学べる)、3. 自立、4. 友だち、5. 遊び場、6. 専門の保育、7. その他

第16図 保育所入所の賛否



の選択肢のうち、1~4に集中してそれぞれ30%前後のものが保育所に預ける利点としている。地域的にみると、東京が「規則的な生活」と「自立」が多いのに比べ、他地域では「学習」が多くなっている。母の学歴別では高学歴が東京と同じ傾向を示している。母の職業の有無でみると、職業をもつものが「規則ある生活」が多く(46%)、職業のないものは23%であり、「学習」は逆に有職者26%、無職のもの42%になっている。家族構成では「規則正しい生活」が1位で核家族40%、複合家族35%となり、ついで核家族は「友だちができる」、複合家族は「学習」となっている。

保育所に小さい子どもを預けることの反対理由は「親が育てるべきである」が50~60%で第1位、つぎ「親子の触れ合いが少ない」が40~46%、そして「子どもが

第27表-① 保育所入所の賛成理由

地域	家族構成	母の職業	母の学歴	規則正しい生活ができる	いろいろなことがおぼえられる	早くから自分のことができる	友だちができる	遊び場がある	専門家に育てられることがよい	人数
沖縄 岩手 東京	核 複合	なし あり	中学卒 高校卒 短大卒以上	① 34.2%	① 34.2	④ 18.5	③ 31.5	⑤ 4.9	⑥ 3.8	184人
				② 33.9%	① 34.7	② 33.9	④ 32.2	⑤ 5.0	⑥ 3.3	121人
				① 53.3%	④ 17.8	② 41.1	③ 28.9	⑥ 8.9	⑥ 7.8	94人
核 複合	核 複合	なし あり	中学卒 高校卒 短大卒以上	① 40.0%	③ 28.6	④ 25.5	② 30.6	⑥ 5.1	⑤ 5.9	255人
				① 35.3%	② 34.5	③ 33.8	④ 32.4	⑤ 7.2	⑥ 2.2	139人
なし あり	なし あり	なし あり	なし あり	④ 22.9%	① 42.2	② 27.7	② 27.7	⑥ 2.4	⑥ 1.2	88人
				① 46.3%	③ 26.2	④ 24.4	② 31.1	⑥ 7.3	⑤ 7.9	164人
				② 31.7%	① 32.7	③ 26.7	④ 24.8	⑤ 5.9	⑥ 4.0	101人
高校卒 短大卒以上	高校卒 短大卒以上	なし あり	なし あり	① 42.6%	③ 29.5	④ 27.1	② 31.8	⑥ 1.6	⑤ 5.4	129人
				① 57.4%	④ 19.1	③ 30.9	② 41.1	⑥ 13.2	⑥ 5.9	68人

第27表一(2) 保育所入所の反対理由

		親が育てるべきである	親子の接触が少ない	子どもがかわいそう	病気の感染が心配	個性が育たない	悪いことをおぼえる	人数
地域	沖縄	① 64.2%	② 43.1	③ 12.8	④ 9.2	⑤ 1.8	⑥ 1.8	109人
	岩手	① 50.7%	② 40.8	③ 21.8	④ 1.4	⑤ 2.8	—	142人
	東京	① 52.0%	② 47.2	③ 10.2	④ 0.8	⑤ 1.6	④ 1.6	127人
家族構成	核	① 55.6%	② 45.3	③ 11.9	④ 3.7	⑤ 1.6	⑥ 1.6	243人
	複合	① 54.1%	② 40.6	③ 33.0	④ 3.0	⑤ 3.0	—	133人
母の職業	なし	① 58.7%	② 44.1	③ 9.8	④ 0.7	⑤ 2.1	⑥ 1.4	143人
	あり	① 49.6%	② 37.2	③ 18.6	④ 7.1	⑤ 2.7	⑥ 0.9	113人
母の学歴	中学卒	① 61.7%	② 36.7	③ 21.7	④ 3.3	⑤ 3.3	⑥ 1.7	60人
	高校卒	① 52.4%	② 46.5	③ 14.4	④ 2.7	⑤ 2.1	⑥ 1.6	187人
	短大卒以上	① 53.8%	② 42.5	③ 15.0	④ 6.3	⑤ 2.5	—	80人

わいそう」10~20%である。他に「悪いことをおぼえる」「病気の感染」「個性が育たない」が僅かのものにあげられている。とくに地域、学歴、家族構成などによる差はみられない。

③未熟労働の母親の職業意識 まず、未就労の母親の職業の経験の有無をみると、殆んどのが経験をもち、全く職業の経験のないものは10%内外である。各地域に大きな差はみられず第28表一(1)のような割合となっている。

第28表一(1) 職業の経験の有無

	ない	ある	無答	計
沖縄	11.8%	80.6	7.6	100.0 (144人)
岩手	7.7	86.5	5.8	100.0 (52人)
東京	9.8	86.6	3.7	100.0 (164人)

第28表一(2) 仕事をやめた時期

	結婚前	結婚にあたり	出産にあたり	子供の入園	子供の入学	その他	無答	計
沖縄	19.8%	28.4	35.3	6.9	2.6	6.0	0.9	100.0 (116人)
岩手	17.8	31.1	35.6	2.2	—	11.1	2.2	100.0 (45人)
東京	14.8	26.8	48.6	0.7	—	7.0	2.1	100.0 (142人)

職業をやめた時期は第28表一(2)のように、各地域とも「出産」が多く、つぎに「結婚」になっている。大差とはいえないが、結婚にあたって家庭に入るものは岩手、沖縄、東京の順になっている。

現在は就職していないが、将来職業につきたいと思っているものは、第29表のように各地域とも60%と多い割合を示している。職業をもちたいと思わないものは岩手

約20%、東京10%、沖縄8%で岩手がかもとも多い(第29表)。

第29表 将来仕事を持ちたいか

	はい	いいえ	判らない	無答	計
沖縄	60.4%	7.6	20.1	11.8	100.0 (144人)
岩手	59.6	19.2	11.5	9.6	100.0 (52人)
東京	59.1	11.0	19.5	10.4	100.0 (164人)

第30表 将来仕事を持つ時の条件

	子供の年齢による	適当な仕事があれば	保育園があれば	学童保育があれば	家族の理解があれば	その他	無答	計
沖縄	24.1%	37.9	2.3	1.1	20.7	6.9	6.9	100.0 (87人)
岩手	9.7	38.7	3.2	3.2	32.3	—	12.9	100.0 (31人)
東京	20.6	32.0	4.1	2.1	29.9	5.2	6.2	100.0 (97人)

将来、職業につくこと条件(第30表)としては、「適当な仕事があれば」というものが多い。「家族の理解があれば」は、複合家族の多い岩手が一番多く、沖縄では「家族の理解」より「子どもの年齢による」が多いのが特徴的である。なお、「保育園」「学童保育」などの施設が充実すれば就労するというものは少なく、東京、岩手が6%、沖縄3%である。

2) 夜間勤務と育児の実態

(1) 調査の手續きおよび対象

夜間保育、長時間保育の需要の実態を調査するために、病院勤務の看護婦他について、育児に関する実態調査をおこなった。対象は沖縄は沖縄県立宮古病院、国立療養所宮古南静園、岩手は岩手県立江刺病院、東京は虎

の門病院、愛育病院の各病院である。各地域の年齢別対象数はつぎの通りである。なお、年齢分布は施設全員でないため、各地域、各病院の傾向ではない。

第31表 年齢別対象数

	10代	20代	30代	40代	50代	無記入	計
沖縄	—	24 (50.0)	17 (35.4)	3 (6.3)	—	4 (8.3)	48 (100.0)
岩手	—	15 (19.5)	33 (42.8)	9 (11.7)	8 (10.4)	12 (15.6)	77 (100.0)
東京	3 (5.4)	18 (32.1)	16 (28.6)	7 (12.5)	1 (1.8)	11 (19.6)	56 (100.0)
計	3 (1.7)	57 (31.5)	66 (36.5)	19 (10.5)	9 (3.3)	27 (14.9)	181 (100.0)

質問紙法による調査であり、質問項目は〈付5〉である。

(2) 家族構成

①回答者の配偶関係はつぎのようになっている。

第32表 配偶関係

	未婚	配偶者あり	離別	死別	無記入	計
沖縄	27.1	70.8	—	—	2.1	(100.0) 48人
岩手	5.2	88.3	2.6	—	3.9	(100.0) 77人
東京	37.5	53.5	1.8	1.8	5.4	(100.0) 56人

以上のように既婚者が多いが、養育意識の調査であるため、調査用紙の配布に偏りがあり、職員全体の割合ではない。一応未婚者も対象とし、将来の養育についての質問を用意したが殆んど回答を得られなかった。

②子ども；既婚者について、子どもの人数をみると、沖縄は2人と3人、岩手は2人、東京は1人が多い。沖縄は20代が全体の半数を占めており、他地域より低年齢であるのに子ども数が多いといえる(第33表-①)。

第33表-① 子ども数

	なし	1人	2人	3人	4人	計	平均子ども数
沖縄	6.1%	12.1	33.3	30.3	18.2	100.0 (33人)	2.4人
岩手	15.9%	11.6	52.3	17.4	2.8	100.0 (69人)	1.8人
東京	8.8%	52.9	29.5	8.8	—	100.0 (34人)	1.5人

第33表-② 子どもの年齢分布

	歳0	歳1.2	歳3~5	小学生	中学生	高校生	高卒以上	計
沖縄	8.0%	20.0	26.0	36.0	6.0	2.0	2.0	100.0 (81人)
岩手	1.6%	12.1	23.4	38.7	11.3	7.3	5.6	100.0 (124人)
東京	12.8%	23.4	12.8	21.3	2.1	8.5	19.1	100.0 (47人)

子どもの年齢は、0歳から高杖以上までに広がり、乳幼児、小学生をもつ母親が各地域とも多く、職種から養育上の困難な問題をかかえているといえる。

③家族

a 家族形態を祖父母との同居(三世代家族)と核家族に分けるとつぎのようになる。

第34表 家族形態

	核家族	三世代家族	無記入	計
沖縄	74.2%	22.9	2.9	100.0 (35人)
岩手	50.7%	41.1	8.2	100.0 (73人)
東京	94.3%	2.9	2.9	100.0 (35人)

東京は殆んどが核家族であり、祖父母と同居のものは3%にすぎない。これに比べて岩手は三世代家族が40%強であり、沖縄は20%強になっている。

b 夫の職業はつぎに示すように、会社員がもっとも多い。農村地区の岩手では祖父母が農業に従事し夫が他の職についている。東京は会社員・公務員と教員のみである。全体として会社員が大部分であり、比較的日中子どもと接触できる職業は会社員・教員を除いた16.8%である。

第35表 夫の職業

	農業	自営業	公務員 会社員	教員	運転手	職人	無職	人数
沖縄	6.7%	6.7	73.3	6.7	3.3	3.3	—	30人
岩手	8.3%	6.7	71.7	5.0	1.7	3.3	3.3	60人
東京	—%	—	89.7	10.3	—	—	—	29人
計	5.9%	5.0	76.5	6.7	1.7	2.5	1.7	119人

(3) 勤務状況他

①単夜勤務・深夜勤務；勤務状況を調べるため、日勤のほかに単夜勤、深夜勤があるかをたずねた。各施設により多少の時間差があるが、単夜勤は大体午後4時から12時まで、深夜勤は午前0時から午前8~9時までである。1か月の平均回数をみると、月に4回前後の単夜勤と深夜勤があり、月に8~10日が夜の勤務についているといえる。

	単夜勤	深夜勤
沖縄	4.5回	4.3回
岩手	3.6	4.3
東京	4.6	5.4

②通勤時間 就労する母親にとって、職場と居住地の距離や通勤に要する時間は心身の負担に大きく影響を与

える。各地域別に通勤に要する時間をみると、沖縄では98%が30分以内である。岩手は30分以内のもの86%で、東京では54%である。東京では1時間以上のもが17%と他地域より著しく多くなっている。東京の15分以内のものには寮生活のものが含まれている。

第36表 通勤時間

	～15分	16～30分	31～60分	61～分	計
沖縄	66.0%	31.9	2.1	—	100.0 (47人)
岩手	48.1%	37.7	13.0	1.2	100.0 (77人)
東京	37.0%	16.7	29.6	16.7	100.0 (54人)

③勤務年数；勤続年数をみると、沖縄は5年以内で半ばを占めている。岩手は5年～15年のものが約60%、東京は1～10年に集中し60%を占めている。つまり、岩手が勤続年数の長いものが多く、つぎは東京であり、沖縄が一番短期間になっている。これを通算年数でみると、地域的には勤務年数と同じ特徴がみられ、岩手、東京、沖縄の順に年数が長くなっている（無記入者を除いたため、勤続年数と通算年数の対象数は一致しない）。

第37表一(1) 勤務年数

	～1年	1～5	6～10	11～15	16～20	21～25	26～30	計
沖縄	7.0%	46.5	25.5	14.0	7.0	—	—	100.0 (43人)
岩手	3.9%	15.8	29.0	27.6	9.2	7.9	6.6	100.0 (76人)
東京	16.7%	25.8	33.3	11.1	9.3	1.9	1.9	100.0 (54人)

第37表一(2) 通算年数

	～5年	6～10	11～15	16～20	21～25	26～30	31～	計
沖縄	50.0%	23.8	19.0	4.8	2.4	—	—	100.0 (42人)
岩手	9.8%	27.8	23.0	16.4	11.5	8.2	3.3	100.0 (61人)
東京	25.0%	33.3	27.8	5.6	5.6	2.7	—	100.0 (36人)

転職の有無については、転職経験者は沖縄23%、岩手48%、東京47%であり、沖縄は対象者の通算勤務年限が短いだけに転職者も少なくなっている。転職回数は岩手と東京は平均がほぼ同じであるが、東京では8回も転

職しているものがおり、回数の偏差が大きい。

沖縄 岩手 東京

転職経験有	4人	17人	20人
転職回数(平均)	1.5回	1.9回	1.95回

④夜間勤務従事者の乳幼児養育の実態；母親の勤務中、子どもの養育をどうしているか、乳児および1～2歳児を対象に実態をみた。

第38表 母親勤務中の子どもの養育

		家族がみる	保育園	職場保育	保育ママ	親戚・知人に預ける	計
核家族	日中	8.1%	56.8	10.8	5.4	18.9	100
	夜間	86.5	—	2.7	—	10.8	100
三世代家族	日中	87.4	6.3	6.3	—	—	100
	夜間	100.0	—	—	—	—	100

第38表に示すように三世代家族では日中、夜間ともに殆んどが家族が養育している。核家族では保育園、職場保育の他に親戚・知人、保育ママに預けており、夜間は大部分のもの（87%）が家族の養育である。つまり、夫が養育に当たっているといえる。親戚や知人宅に預けるものが10.8%いるが職場保育は僅か2.7%である。

⑤夜間勤務従事者の職業と養育の意識；夜間勤務に従事するものの職業継続についての意識をしらべた。これを既婚未婚別にみたものが第39表である。別の職業に転じたいものは1～2%にすぎない。また、職業をやめたいものは未婚者にはなく、既婚者にも5.6%とわずかであった。両者ともに「ずっと勤務を継続したい」に集中しているが、未婚のものより既婚者の方に多くなっている。「勤務条件を変えて」「しばらく続けたい」は未婚者の方が多い。それでも15%内外であり、結婚まで、あるいは出産までと述べている。

母親が職業をもつことについては、賛成のものが多く、反対は既婚者に8%弱あるだけである。「どちらともいえない」が両者ともに約30%みられる(第40表一(1))。賛成の理由は第40表一(1)（マルチ回答一人数を100%としての各回答率）にみるように、既婚者と未婚者では差があり、既婚者の方に多いのは「家計の助け」「子どもへの干渉がなくなる」、反対に未婚者の方が多いのは「視

第39表 職業継続の意識

	ずっと続けたい	しばらく続けたい	勤務条件をかえて続けたい	別の職に転じたい	やめたい	わからない何ともいえない	無記入	計
既婚者	62 (43.3)	11 (7.7)	11 (7.7)	2 (1.4)	8 (5.6)	42 (29.4)	7 (4.9)	143人 (100.0)
未婚者	13 (34.2)	6 (15.8)	5 (13.2)	1 (2.6)	0 (0)	11 (28.9)	2 (5.3)	38人 (100.0)

野が広がる」「自分の自由になるお金が入る」である。両者ともに「生活に張りができる」「視野が広がる」が1～2位を占めている。母親が職業をもつことに反対のものは既婚者にわずかにみられるが、その理由は、「子どもの世話ができない」7名、「母親の負担が多い」6名、「家事がおろそかになる」3名であり、「夫の世話

第40表一(1) 母親就労についての賛否

	賛成	反対	どちらともいえない	わからない	無記入	計
既婚者	69 (48.3)	11 (7.7)	44 (30.8)	7 (4.9)	12 (8.4)	143 (100.0)
未婚者	24 (63.2)	0 (0)	11 (28.9)	0 (0)	3 (7.9)	38 (100.0)

第40表一(2) 賛成理由

	家計の助けになる	生活に張りができる	視野が広がる	自分の自由になるお金が入る	子どもの過保護干渉しすぎがなくなる	その他	計
既婚者	38 (55.1)	42 (60.9)	39 (56.5)	15 (21.7)	11 (15.9)	6 (8.7)	69 (100.0)
未婚者	7 (29.2)	15 (62.5)	18 (75.0)	6 (25.0)	2 (8.3)	2 (8.8)	24 (100.0)

がおろそかになる」はゼロである。

⑥夜間勤務と養育の問題；夜間勤務をもつために子どもの養育上、困ることや心配なことは第41表に示すように、子どもが病気の時看てやれない、預ける人がいない、休暇がとれないなど子どもの病気が一番問題になっている。その他、子どもと接触時間が少なく世話をしつげができない、夜間保育、長時間保育など子どもを預てくれる所がないと訴え、乳幼児をもって夜間勤務に従事する苦心がみられる。

第41表 困ること・心配なこと

困ること心配なこと	人数
子どもが病気の時困る	39
子どもとの接触時間少ない	17
しつけや世話ができない	10
子どもの気持が不安定になる	8
留守中の子どもの様子わからない	6
保育所がない	6
保育時間が短い	4
園や学校の行事に行かれない	4
夜勤の時子どもをみてもらう人がいない	4
勉強みてやれない	3
時間的・精神的にゆとりがない	9
通勤時間がかかる	4
保育料高い	1

要望する施設としては、夜間保育、長時間保育、職場保育所、乳幼児を預る施設が多いが、児童館・学童保育など学童の施設も望まれている。育児休暇がほしい、保育料が高いなど施設への要求も出されている。病児保育もそのひとつである。(第42表)。

3) 小 括

母親の就労状況は、地域の特性を示し、岩手は家業(農業)が30%を占める。東京は他の地区よりパート勤

第42表 必要な施設

必要な施設	人数
夜間保育・長時間保育	25
公立保育所	18
児童館・学童保育	15
職場保育所	11
育児休暇	5
病児保育	4
保育料を安く	4
児童図書館	2
夜間診療の病院	1
身障児施設	1
ベビーシッターの教育・紹介	1
3歳未満児の医療給付	1

務、内職が多くなっている。

就労中の子どもの生活をみると、東京は保育所に預けるものが多く、5歳児では74% (3歳児100%)、幼稚園26%である。沖縄は5歳児は全員幼稚園であり、岩手は保育所55%、幼稚園45%と相半ばしている。沖縄・岩手は、幼稚園の短時間保育でも家族・親戚あるいは地域で子どもたちは守られているといえる。子どもの帰宅時間より母親の方がおそいものが80%であることでもうなづける。東京は母の帰宅の方がおそいものは14%にすぎない。核家族のため、保育所に寄って子どもを連れ帰るか、パート勤務・内職従事の形をとっているためであろう。母親の就労は子どもの生活に影響をもたらす。職業のない母親の家庭と比べ、子どもの起床時間は早く、就寝時間は遅くなっている。従って睡眠時間は短くなり、18分の差が出ている。夕食時間も18分遅くなり、朝食を抜くものが多くなる。しかし、職業をもたない家庭でも朝食抜きは14%ある。

就労していて養育上問題になることは、全体として子どもとの接触時間が少ない、が一番多く、岩手では祖父祖母とのしつけの不一致、東京では子どもの病気の時、保育所の保育時間が短かいがづきに挙げられている。

乳幼児をもつ母親の就労について、賛成意見は職業をもつものの方が57%、無職の母33%であるが、反対であるとするものはいずれも10%内外である。3歳未満児を保育所に預けることでは、有職者に賛成が多く、無職者に反対が多い。賛成の理由をみると、東京と有職者に「規則正しい生活」「子どもの自立」が多く挙げられ、沖縄・岩手および無職者に「学習する」が挙げられている。

未就労の母親も、職業の経験あるものが多く、結婚や出産で退職しており、経験の全くないものは10%である。なお、将来就職したいものは60%と、職業を希望するものが多い。

(2) 夜間勤務をもつものの育児の実態を調べるため、病院勤務の看護婦対象に調査した。1~2歳の子について夜間勤務中の養育状況をみると、三世代家族では殆んどが祖母が子どもをみている。核家族では、日中は保育所、職場保育、親戚、知人、あるいは保育ママに預け、夜は大部分が家庭で夫がみている。一日のうち、保育所のあと親戚にというような二重、三重の保育をしているものもある。

勤務状況は単夜勤(午後4時から12時まで)深夜勤(午前0時から午前6時まで)がそれぞれ月に4回前後であり、夜間勤務は月に8~10回、つまり3~4日に1回はまわってくる。このような状況ではあるが勤続年数をみると、10年、20年と長期のもの多く、子育てをしながら職業を続けていることが明かである。また、現職業への意識は強く、他の職に変わりたいものは2%にすぎない。乳幼児を育てながら職業を続けることには圧倒的に支持者が多い。

夜間勤務に従事し、養育上多くの問題をかかえているが、とくに困るのは子どもの病気の時である。預ける人がなく、看てやる人がなく、そして休みもとれない現状である。この他、子どもとの接触が足りない、園や学校の行事に出席できないことなどさまざまある。そして、長時間・夜間・病児保育、職場保育、乳児保育と保育への需要が多く出されている。ニーズに応じた保育施設がのぞまれる。

5. 地域福祉の視点からみた児童養育

地域における福祉は、その地域社会を構成している家庭の機能の健全化をはかることであり、地域社会の機能はまた、家庭の機能の強化やサポートすることにもつな

がっている。この相互関連によって地域福祉の実体が創り出されるのである。したがって、児童の養育上地域環境は、家庭環境の充実とともに重要な環境でその対人コミュニケーションの機会の如何による影響は大きいといえる。

本調査においてまず、母親が現在居住している地域に対する評価をみるために「将来もずっと住みたいと思っているか否か」を問うてみた結果は、第43表の如く地域的特徴が著しくあらわれている。つまり自然環境に恵まれ、代々その土地に住みついている状況にある沖縄においては64.9%、同じ条件をもっている岩手でも51.5%と過半数を占めている。

第43表 将来の居住地について

地域別	沖縄	岩手	東京	計
将来に対して				
ずっと住みたい	265 64.6%	190 51.5%	82 21.6%	537 46.4%
住みたくない	15 3.7	28 7.6	92 24.3	135 11.7
考えたことがない	35 8.5	65 17.6	42 11.1	142 12.3
わからない	72 17.6	70 19.0	152 40.1	294 25.4
N. A.	23 5.6	16 4.3	11 2.9	50 4.3
計	410 100.0	369 100.0	379 100.0	1,158 100.0

それに比して、人口流動の著しい居住条件の悪い東京では21.6%とその半数以下となっている。「住みたくない」とする回答は、逆の結果を示し、沖縄、岩手では10%以下であるのに比して東京はその2倍以上となっている。東京の場合は、現居住地にはいわば懐掛的であることがわかる。それはまた考えもせず「わからない」40.1%となっているのにも関連して居住地域の福祉を考える余裕のないことを明示しているといえよう。したがって東京での地域活動の育たない状況をも示しているのであり、それは児童養育上に地域住民の態度としていかに対応するかの課題とも関連させて考えねばならない。事実、沖縄や岩手では、地域子ども会の組織化や、地域の大人たちによる子ども会育成のための組織もつくられ、活動も東京に比べて盛んである。とくに岩手県では、小中学校単位の福祉教育の展開が盛んに行われている。調査地域区内の家族教及び子ども教は、沖縄が最も多く、岩手では沖縄に照合してみても都会的現象がみられてきている。

さらに、現在の居住地域にいつから住みついたかをみると(第44表)これもまた明確な差が出ている。「生まれたときから」とするものは沖縄40.5%、岩手26.8%に

第44表 現在地への居住時期について

地域別 現在地の 居住時期	沖 縄	岩 手	東 京	計
生まれたときから	166 40.5%	99 26.8%	17 4.5%	282 24.4%
結婚前から	31 7.6	17 4.6	23 6.1	71 6.1
結婚後から	94 22.9	197 53.4	132 34.8	423 36.5
子どもが生まれ てから	102 24.9	45 12.2	200 52.8	347 30.0
N. A.	17 4.1	11 3.0	7 1.8	35 3.0
計	410 100.0	369 100.0	379 100.0	1,158 100.0

比して東京では4.5%と極めて少ない。定着性のないことを浮彫りにしている。「結婚してから」というのは、他地域から嫁いできたことを表わしている。「子どもが生まれてから」というものは東京で52.8%で岩手の4倍強となっている。このような大雑把ではあるが、地域差の著しい特徴をふまえて以下調査結果をベースとして児童養育上の問題を検討してみたい。

第45表 困ったときの相談相手の選択 (M. A.)

相談先 困ったときの 相談内容	相談相手																	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	
	父 親	祖 母	そ 家 の 他 の 族	実 家 の 人	近 所 の 人	友 人	保 健 所	福 祉 事 務 所	保 育 所	幼 学 稚 児 園 の 先 生	児 童 相 談 所	電 話 相 談	病 院 ・ 医 院	そ の 他 の 人	育 児 書	相 談 が い ない	N. A.	
育 児 の 事 件	沖 縄	218 53.2	64 15.6	21 5.1	72 17.6	48 11.7	94 22.9	20 4.9	1 0.2	29 7.1	19 4.6	4 1.0	2 0.5	16 3.9	1 0.2	52 12.7	5 1.2	36 8.8
	岩 手	207 56.1	137 37.1	15 4.1	57 15.4	30 8.1	96 26.0	22 6.3	5 1.4	33 8.9	22 6.0	11 3.0	—	13 3.5	4 1.1	42 11.4	3 0.8	19 5.1
	東 京	213 56.2	82 21.6	83 22.7	86 26.0	102 33.2	163 43.0	19 5.0	3 0.8	45 11.9	18 4.7	12 3.2	5 1.3	29 7.7	10 2.6	44 11.6	2 0.5	10 2.6
子 ども の し つ け や 教 育 の 事 件	沖 縄	242 59.0	40 9.8	21 5.1	42 10.2	33 8.0	87 21.2	2 0.5	—	35 8.5	61 14.9	8 2.0	1 0.2	1 0.2	1 0.2	5 8.0	33 2.2	9 8.3
	岩 手	237 64.2	105 28.5	17 4.6	37 10.0	21 5.7	75 20.3	5 1.4	5 1.4	43 13.0	72 19.5	15 4.1	—	0.3	1.4	5 6.8	25 1.4	5 5.4
	東 京	251 66.2	61 16.1	31 8.2	62 16.4	64 16.9	126 33.2	5 1.3	5 1.3	45 11.9	84 22.2	14 3.7	9 2.4	1 0.3	2.1	8 5.3	20 0.3	11 2.9
家 庭 内 の い ざ こ ざ	沖 縄	70 17.1	46 11.2	35 8.5	87 21.2	8 2.0	111 27.1	—	—	1 0.2	—	—	—	—	—	13 3.2	—	88 21.5
	岩 手	101 27.4	48 13.0	20 5.4	123 34.7	9 2.4	106 28.7	—	—	12 3.3	2 0.5	—	—	—	—	9 2.4	—	45 12.2
	東 京	88 23.2	72 19.0	46 12.1	124 32.7	9 2.4	123 32.5	1 0.3	8 2.1	1 0.3	1 0.3	—	—	—	—	16 4.2	—	43 11.3
病 気 ・ 健 康 の 事 件	沖 縄	152 37.1	68 16.6	22 5.4	61 14.9	25 6.1	42 10.2	23 5.6	3 0.7	2 0.5	8 2.0	—	—	2 0.5	225 54.9	3 0.7	20 4.9	3 0.7
	岩 手	172 41.6	125 33.9	19 5.1	66 17.9	21 5.7	43 11.7	18 4.9	8 2.2	5 1.4	7 1.9	—	—	2 0.5	206 55.9	7 1.9	19 5.1	8 2.2
	東 京	179 47.2	81 21.4	27 7.1	84 22.2	70 18.5	91 24.0	23 6.1	1 0.3	13 3.4	4 1.1	—	—	6 1.6	233 61.5	3 0.9	37 9.8	8 2.4

1) 家庭児童相談の実態

家庭児童相談室は昭和39年より一般家庭児童対策の強化をはかるために、地域に密着した相談室として各地域の福祉事務所に設置された。沖縄の場合はすべて返還後の動きであるが、現時点では沖縄、岩手両地域には設置されているが、東京の場合は、設置されていない、但し39年前より独自(単独事業)に家庭相談員を福祉事務所に設置しており、この業務を含めて既に活動をしているとみられる。

昭和53年度の統計資料によると(各地域の福祉事務所事業報告)件数はともかくとして相談内容は、沖縄では第1位が非行で相談件数の60%を占め、第2位に心身障害に関するものとなっている。岩手では、第1位が家庭家族関係で相談件数の50%を占め、第2位は学校生活上の問題で20%となっている。なお岩手の場合、昭和50年度までの第1位は非行があげられていたが、51年度より前述の結果となり今日に至っている。沖縄の場合は49年度相談室の設置以来非行がトップで6ヶ年間継続していることが特徴的である。東京では、この相談室が設置さ

れていないため、同列においての比較は出来ないが、児童相談室（公立及び民間を含めて）の傾向をみると、家族関係、知能、言語に関して、学校生活に関するもの、非行、生活習慣の問題というように広範なまた多様化された内容となっている。

これらの実態に対して、地域での民生・児童委員の協力参加は、沖縄、岩手では非常に積極的であるのに比して、東京の場合は低調であると言わざるをえない実情である。岩手の場合は、とくに学校教師との連携が比較的にスムーズに行われているようである。

2) 困ったときの相談相手

「育児のこと」「子どものしつけや教育のこと」「家庭内のいざこざ」「病氣・健康のこと」と四つの場合の相談相手についての回答結果は第45表に示すとおりである。地域別にはそれほど著しい差はみられないのが特徴といえるかもしれない。しかし相談の内容によっては多少の差が認められる。たとえば「育児のこと」「しつけ、教育のこと」は父親つまり夫と相談するが「家庭のいざこざ」となると実家及び友人が多くなっている。育児のことで東京の場合は友人が他の二地区に比して著しく高卒を示している。岩手の場合は、何れの相談にも他の二地区に比して平均的に祖父母を相談相手としていることが目立っている。これは居住状態にもよるが、最近の都市化現象の特徴として、近隣関係の希薄化が指摘されているが、この結果によると団地であることも影響してか、子どもに関しての相談として健康、しつけなどは、他の二地区と比して近隣の人々が比較的多数に及んでいる。病氣に関しては、病院が過半数以上になっていることは当然のことであるが、東京の場合に友人が24.0%にも達していることは注目されよう。これらのことから各地域共通にいえることは、児童相談所をはじめとする専門の相談機関、施設職員などは非常に低率であることである。育児に関しても、健康のことに関しても、保健婦の存在があまりに浮彫りにされていない。沖縄では保健婦の地域に対する活動が活発に行われているのに、子どもとの関係付けがなされていない、つまり、日常活動が地域に浸透しているために、改めて相談相手としてあげることが不自然なのかもしれない。地域に根ざした活動の成果としてこの結果に及んだもので評価されてよいのかもしれない。

3) 地域内保健・福祉関係施設および機関についての住民の関心度

保健・福祉施設に対する住民の関心はいかなるものであろうか。これを把握するためただ単に施設、機関について知っているか否かを問うよりも、何が不足している

第46表 地域内関係施設に対する住民の認知度 (M. A.)

地域の施設に 対する不足感	地域別		
	沖 縄	岩 手	東 京
保 健 所	5 1.2%	7 1.9%	38 10.0%
総 合 病 院	150 36.6	108 29.3	219 57.8
診 療 所・医 院	33 0.8	72 19.5	48 12.7
福 祉 事 務 所	2 0.5	—	9 2.4
児 童 相 談 所	72 17.6	38 10.3	24 6.3
保 育 所・託 児 所	89 21.7	49 13.3	97 25.6
幼 稚 園	10 2.4	32 8.9	121 31.9
学 校	10 2.4	7 1.9	13 3.4
児 童 館	108 26.3	62 16.8	50 13.2
学 童 保 育 所	35 8.5	28 7.6	78 20.6
公 園、遊 び 場	272 66.3	197 53.4	101 26.6
乳 児 院	28 6.8	53 14.4	8 2.1
養 護 施 設	12 2.9	36 9.8	10 2.6
心 身 障 害 児 施 設	21 5.1	54 14.6	29 7.7
母 子 寮	27 6.6	11 3.0	11 2.9
老 人 福 福 施 設	25 6.1	35 9.5	28 7.4
そ の 他	2 0.5	14 3.8	6 1.6
わ か ら な い	51 12.4	55 14.9	45 11.9
N. A.	30 7.3	15 4.1	15 4.0

か否かを問い、その認知度を確かめてみた。その結果が第46表の複数回答である。表によると「公園、遊び場」が最も多くなっているが、東京の場合は総合病院に集中している結果が目立っている。公園、遊び場の不足をあげているのは、東京よりむしろ沖縄、岩手であり、東京の2倍強を示している。その不足を感じている沖縄、岩手、東京の三地域とも、「その地にずっと長く住みたい」としているものがその殆んどになっている。子どもをもつ親の望みとしてという側面では「東京においても「住みたくない」としている親でも40%強となっている。沖縄、岩手地域は日常的に自然や緑に恵まれ、地域それぞれが公園遊び場の要素を充分整えているように見られるが、当該者からみれば、何らかの人工的整備がなされなければと思っていることがわかる。また保育所についても、岩手がその不足感、認知度が低く、沖縄、東京

の方に高くなっている。児童相談所についてみれば、非行率の高い沖縄に必要度が高く17.6%、岩手10.3%、東京は6.3%と低くなっている。これらの事項を母親の就労状況とクロスしてみると、医療施設に対する不足感が高く共通の結果を示しているが、保育所に関しては毎日勤めに出ている親よりも、パートで勤めている親に不足感が高く、尚関心度も強い。既に毎日勤めている場合は、保育所入所可能な条件下にあり、パートで勤めている母親にその必要性が高く、且強くあらわれている。したがって学童保育、児童館の必要性が、家業従事の母親、内職者に比較的要請の姿勢が強く出ている。

第47表 家の広さに対する実感

家屋の状況 <家の広さ>	1	2	3	計
	沖縄	岩手	東京	
せまい	106 25.9%	54 14.6%	184 48.5%	344 29.7%
まあまあ の広さ	245 59.8	186 50.4	185 48.8	616 53.2
広い	57 13.9	126 34.1	7 1.8	190 16.4
その他	1 0.2	1 0.3	2 0.5	4 0.3
N. A.	1 0.2	2 0.5	1 0.3	4 0.3
計	410 100.0	369 100.0	379 100.0	1,158 100.0

とくに児童館、遊び場に対する要求の強い層は、何れの地域でも家の広さと関係があり「せまい」と回答した沖縄、東京の場合に不足感が高く示されている。但し「まあまあ」の広さ」という回答の中に物理的には狭い状況の場合も含まれている。また沖縄と東京の居住者では「感覚のちがいが」もあり、子どもにとっての差は大きいと言えよう。次に子ども部屋の有無と照合してみると子ども部屋をもたない家庭の母親の回答に、児童館、遊び場の不足感を訴えるものが多い。加えて、パートで働く者、内職をもつ母親にその要請が強くあらわれている。学童保育についても然りという状況である。第48表によれば、沖縄では子ども部屋の有るものが59.8%と高く、東京では住宅事情とも関係が深く「ない」と回答したものが53.0%と高くなっている。何れにしても地域内施設不足感、それぞれの生活実感からのものが多いことを明示しているといえる。それは家計状況と照合してみても、パートで勤めている場合に大変苦しいとしているものが10.3%あり、何とかやっているといる状態の母親の希望も学童保育、児童館、遊び場を要求しているのである。

第48表 子ども部屋の有無

<子ども部屋の有無>	沖縄	岩手	東京
あ	245 59.8%	174 47.2%	159 42.0%
な	161 51.2	189 51.2	201 53.0
そ	2 0.5	6 1.6	17 4.5
その他	2 0.5	—	2 0.5
N. A.	2 0.5	—	2 0.5
計	410 100.0	369 100.0	379 100.0

難いが親の側にたつてのものと、子ども側にたつての要求と、その両者が併存しているものとみることができよう。地域全体としての連帯による子ども中心の要求と、それに基いた社会資源(地域内施設)の認知度の高いことが指摘できるのである。

4) 地域福祉と児童養育

前項で明らかになったように、地域社会資源とくに児童養育に関連した施設、機関の不足感、認知度にあらわれたものは、親の生活実感に直結した型のものが多い。

近年コミュニティー・ケアに関する各地方自治体の施策が推進されてきていることと考えあわせて、地域社会全体で、地域児童の福祉活動に参加協力していく土壌を創り出し、出ることが必要となつてこよう。

児童養育は、まさに家庭と地域社会との相互有機的な連携の上にたつて全うされなければならない。児童に関する福祉機関、施設、保健医療に関する施設、および教育の領域との機能的役割分担を明確にし、地域の実状にそくした養育上の社会化が図られることの必要性があろう。その意味から言えば岩手及び沖縄では、それなりの地域特性を踏まえて、地域組織展開の芽生えがみうけられる。とくに沖縄の場合は、本土復帰後の動きの中に、「本土に追いつけ、追いこせ」という意地にも似た地域福祉関係者及び民生児童委員の意気込みに注目される。保育所づくりには施策上力を注ぎ、母親の就労の増加とあわせて、復帰後地域的に積極的動向が顕著である。岩手、東京の保育所設置数及び分布状況からみると岩手の方が率としては高く、設置数ではその推移が昭和26年を1として30年1.6、40年3.6、50年6.0となつており、東京では30年1.5、40年2.1、50年5.0となつており、岩手のそれより率としては下まわつてはいる。但し東京の場合は地域差が大きく、都心では減少し、郊外地域では、高率を示していることがわかる。その点沖縄の場合は、昭和46年を1としてみて概ね3ヶ年間の53年に1.7の率を示し、その需要は、単一機能としての保育所を求めていることがわかり、これは岩手と同傾向を示している。

東京の場合は保育需要の多様化による複数機能が求められている。即ち母親の就労形態、時間の多様化によるものである。しかし沖縄では、東京のたどった経過より急速にその保育需要の多様化現象が予測されよう。

児童相談所の総数受付件数を児童人口比でみると岩手72、東京55、沖縄59という指数をみても上記の予測が裏付けられるように東京の傾向に近似している。しかし地域的外的条件から巡回相談の必要度においては、東京1.0、岩手9.4、沖縄9.8という東京との類似より岩手との近似をみることができ、沖縄は今後にむけての変数の大きさを指向しているのではないと思われる。

いずれにしても生活展開上、児童をめぐる身近な問題を地域社会の中で解決しようとする意機の変革及びその体制を創り出していく必要がある。加えて、ある一定の地域社会（小地域社会単位）内での相談機能のシステム化をはかることが、家庭の機能の変化によってもたらされる児童養育上の諸問題を事前に解決できることに関連するといえよう。いわば予防的、開発的対応が可能となる。また家族関係病理現象への早期対応と、家庭機能強化の対応策の確立へのアプローチが望まれる。

住民の居住定着化とともに、児童養育上の拠点としての地域社会づくりも必要であり、地域社会という場が、児童にとって日常生活欲求充足の場となるような住民相互間の調整と配慮が必要である。家庭の機能の問いなおしとともに、社会の児童の健全育成に果たす役割機能を明示していくことの意味は大きい。児童の発達に応じた生活圏の拡大、豊富な体験学習の機会を提供できうる地域の条件整備こそ、家庭機能の変化に伴う福祉需要に対応できる状況づくりとなりえよう。

IV 総括および提言

以上、1. 児童の養育と身体発育・健康状態、2. 食生活の実態と栄養摂取状況、3. 母親の養育態度と児童の生活の実態、4. 母親の就労と保育需要、5. 地域福祉の視点からみた児童養育の五項について、調査の結果をまとめ、各項で考察をおこなった。ここで本調査結果および現地における地域有識者との面接調査を通して総括するとつぎのようになる。

1) 家庭機能の変化

家族形態をみると、核家族が各地域とも年ごとに増加しているが、核家族の率は東京（団地）92%、沖縄（平良市）75%に対し、岩手（江刺市）は23%と三世代家族が多くなっている。沖縄は子ども数も多く3～4人のものが最も多く、岩手は2～3人、東京は1～2人に集中している。母親が職業に従事しているものは岩手80%

強、沖縄60%、東京40%である。沖縄では結婚後も職業をもつこと、そのために資格をもつことは結婚の好条件にもなっている。日本の高度経済成長の時期からますます母の就労が多くなり、核家族も増加している。岩手では、農業の機械化、市の誘導工場進出などにより、家族中で農業という形態から、現在は祖父母が農業に従事し、父母は事務職、工員として働くものが殆んどである。東京を含め、各地とも、現在職業をもたない母親も就労への意欲をもつものが多い。現在の核家族の育児、母親の就労と育児の問題は、今後増幅されていくと考えなければならない。

2) 子どもの発育と健康状態

各地での診察において、概して皮下脂肪の沈着がよく、栄養状態は良好で健康で明るい子どもたちである結果を得た。身体測定でも発育は大きな地域差はみられなかった。しかし、血色素量においては岩手に問題値のものが15%弱あった。東京は身体発育値、血色素量ともに優れていた。う歯罹患率は沖縄81%、岩手74%と高率であった。う歯を発見しても医療施設が数少なく、遠距離のため処置が困難であることと、乳児のう歯は治療しなくてもよいという観念（特に三世代家族の多い岩手）から治療していないことが明らかになった。その適切な指導および治療を容易にする対策がのぞまれる。

3) 子どもの食事と栄養

母親たちが養育上子どもについて困ることでは食事に関する問題がもっとも多かった。しかし、実際には家族が揃って夕食を食べられない、母親の職業の有無にかかわらず朝食を抜いている、インスタント食品が多い、甘いもの、ジュースなどのおやつを好き放題に与えるなど食生活に対するおとなの姿勢にも問題は多い。なお、岩手では貧血児が保育所児より幼稚園児に倍以上みられたことは、保育所給食が子どもの栄養に大きな役割を果たしているといえよう。また、一般家庭、あるいは母が就労しながら幼稚園に通わせている子どもたちの昼食やおやつがおろそかにされているともいえる。現代の子どもが骨折が多く、ひよわであるといわれる要因の一つも食事にある。将来の日本をにやう子どもたちの身体づくりの基礎として、幼稚園、保育所、保健所などによる家庭の食生活の指導の必要を痛感する。

4) 母親の養育意識

母親の子どもの理想像は「元気でびのびした、思いやりのある子」に集中し、地域差、学歴差、子どもの性別による差はみられない。また、将来の理想の人間像も「人間味のある人」が各地域、子どもの性別の差がなく1位に挙げられている。つまり、日本中の母親が男の子、

女の子にかかわらず「のびのびとした元気な子で将来は人間味のある人間になってほしい」と願っていることになる。しかし、義務教育でよしとする者は皆無といってよく、現実には、競争社会、受験戦争に子どもを追いこんでいる親たちである。親の理想の子ども、理想の人間像に向っての養育を阻んでいる事態に対し、社会全体の責任として憂慮し、急務の課題として広く社会的な施策との関連において取り組むことが必要である。

5) 母親の就労と保育需要の多様化

母親の就労は子どもの生活に影響を与え、子どもの睡眠時間が短くなり、朝食を抜くことも多くなっている。東京では子どもを保育所に預けて就労するものが大部分であるが、岩手、沖縄では幼稚園に預けているものも多い。沖縄では4歳児まで保育所、5歳児は全員幼稚園の形をとっている。幼稚園帰宅後は家族・親戚・知人が育てている。一方、沖縄、岩手ともに保育所待機児には親の集団教育の要望から保育所を望むものが含まれている。この数は沖縄では待機児400名の半数と推計されている。

夜間勤務をもつ母親について看護婦を対象にみると、準夜勤（午後4時～午前0時）と深夜勤（午前0時～午前9時）がそれぞれ月に8～10回で3～4日に一日夜勤の勤務状況である。子どもの養育は日中は家族、保育所あるいは保育ママに預け、夜は大部分家庭でみている。三世代家族では祖母、核家族では夫がその担当者である。一日のうち、保育所から保育ママそして家庭と、二重三重の保育をしているものもある。そして、切実な訴えとして長時間・夜間・病児保育、職場保育、乳児保育、学童保育の要望が出されている。また沖縄の平良市では接客業の母親たちのための夜間保育の施設が子どもの実状からみて必要であるとの意見が出された。

以上のように保育需要は多様化してきており、地域の実状、ニーズに対応したきめ細かい保育施策の推進が望まれる。

6) 地域福祉と児童養育

現在居住している地域に将来も住みたいと思うものは沖縄・岩手ともに過半数を占めているが東京は2割強で

ある。また東京は居住地域で育ったもの5%弱で殆んどが結婚後移り住んでおり、子どもが生まれてからのものも過半数を占めている。東京は地域への定着性がなく、沖縄・岩手のように福祉教育の地域活動が育ちにくいことが明らかにされた。

地域内保健・福祉関係施設に対して住民の不足感をみると、東京は総合病院に集中し、沖縄・岩手では公園・遊び場を東京より多く挙げている。これは遊具の設置された児童遊園の不足感と考えられる。児童相談所はじめ専門の相談機関に関しては、利用するものは低率であり、これら機関の認知度が低く、従って充実への欲求にまでいたっていないといえる。しかし、沖縄の保健婦の活動、岩手の福祉的活動は日常的に浸透しており、そのために改めて相談機関として意識されないということも考えられる。保育所に関してはパート勤務の親に不足感が強くあらわれ、保育所入所困難な状態にあることがうかがわれ、学童保育、児童館の要望も家業従事の母親、内職者に強く出ている。

児童養育は、家庭と地域社会との相互の有機的な連携の上にならなくてはならない。地域の児童を地域社会で育成していく意識を培っていくとともに、地域の実態、家庭機能の変化に伴う福祉需要への対応策が確立されなければならない。

今回、われわれは福祉・保健・教育・心理各領域の総合的な研究を行った。子どもの歯ひとつをとってみても、母親の養育態度と子どもの生活、市販されている食品類、医療機関の状況と、児童をとりまく環境すべてにわたっている。個々の調査では現象面しか把握できなかったであろう。地域社会全体で児童の健全育成をはかるためには、諸機関のシステム化が要求されるのは当然である。児童養育のための地域診断を行い、地域の実状に対応した福祉施策のためには、総合的研究を積極的にすすめていく必要がある。

本研究は、トヨタ財団研究助成金をうけて行ったものである。

母親の児童養育に関する調査

昭和55年 月 日 記入 記入者名 年 月 日 記入
母親でない場合は姓()を記入して下さい

(1) あなたの住まいについてお答え下さい

区, 市 区, 町, 村

(2) あなたの子どもさんについてお答え下さい

1) 氏名 昭和 年 月 日生 性別 男・女 所 幼稚園 保育所 小学校

2) この子どもさんの妊娠中及び生まれた当時の状態についてお答え下さい
記入するもの○印をつけて下さい

- (1) 妊娠の経過は正常 (2) 異常があった
それはどんな状態でしたか
1. むくみがあった 2. 血圧の異常
3. 妊娠中毒症 4. 貧血
5. その他()

- (3) 出生時は正常な状態 (4) 異常な状態 (5) 未熟児 (6) 帝王切開 (7) 難子分娩
(8) 吸引分娩 (9) 骨盤位 (10) その他()

3) この子どもさんが赤ちゃんの時の栄養についてお答え下さい。
1. 母乳だけ 2. 母乳と人工栄養と両方 3. 人工栄養 4. その他()
(か月まで) (か月まで)

4) この子どもさんの今までの健康状態についてお答え下さい。
1. 健康であった 2. あまり健康ではなかった 3. 病気があった
どんな状態でしたか 病名は何でしたか

5) この子どもさんの体格についてお答え下さい。記入する番号○印をつけて下さい。
1. よく飯をたべた。セービーいったり、ヒュービーいったりする 2. よく飯をたべた
3. よく飯をたべた。よく飲んだりする 4. よく飲んだりする
5. 5. どちらか()がある
6. その他()

(8) あなたの家の近く(子ども)の遊び場がありますか

- 1. 近所に応じ遊び場がある 2. 遊び場は遊ば所がある
3. 遊び場らしいものはない 4. その他()

(9) 1) 少し戻ってんだ質問で恐縮ですが、あなたと御主人のことについてお答え下さい。現在の状況について記入する番号○印をつけて下さい。

- 1. 夫と同居 2. 仕事の場合で別居中 3. その他(理由で別居中)
4. 離婚 5. 死別 6. その他()

2) 1)の質問で、2, 3, 4, 5, 6 の○印をつけた方にだけお答え下さい。その状況は子どもさんが何歳の頃かですか。 歳頃

3) その当時子どもさんが変化がみられましたか
1. 変化はみられなかった
2. 変化があった
どんな状態でしたか

(10) あなたの家庭の状況についてお答え下さい。

- 1. 大変苦しい 2. 何とかやっていける 3. 多少のゆとりがある
4. かなりゆとりがある 5. その他()

(11) 子どもの健康について例へて重大な病気かと思えます。次の中から一つだけ○印をつけて下さい。

- 1. 食事、栄養に気を配る 2. 睡眠を十分に取る
3. 病気の人が近づけない 4. 遊び、スポーツの体力づくり
5. 予防接種をすること 6. 定期的な健康診査を受ける
7. 良い習慣を教える 8. その他()
9. 病気がない 10. わからない

(12) 子どもが病気でなくなった時に一原因となることは何かですか。次の中から一つだけ○印をつけて下さい。

- 1. 相談する人がいない 2. 病気の子どもを育ててくれる人がいない
3. 仕事を休まなければならぬ 4. 病院、診療所が近くにない
5. 医療費が高い 6. その他()
7. 特にならぬ 8. わからない

(13) あなたの家族(いっしょに住んでいる方たち)についてお答え下さい。

これは調査対象の子どもさんからみた家族(例えば父、母、祖父、祖母、兄、姉など)を記入して下さい。この子どもさんについて記入して下さい。

一 家族に当たる人の欄に○印をつけて下さい

Table with 4 columns: 性別, 年齢, 最後に通った学校又は現在通学している学校, 職業, 健康状態(1, 2, 3, のいずれか○印), 主に行方不明な人

次の枠の中の該当するものの番号を記入して下さい。

- 1. 農林漁業 2. 自営・商工業 3. 事務的職業(会社員、公務員など) 4. 専門的職業(教師、医師、技師など) 5. 工員、運転手、職人 6. 販売、サービス業(セールスマン、店員など) 7. その他() 8. 無職

* 祖父母が知られる場合は、母方の場合は姓欄に○をつけて下さい(祖母)のように入。
* 住み込みの人、手付込みの人、家族の人など同居している人は全部記入して下さい。

(14) あなたの家庭の状況についてお答え下さい。

- 1) 広さについてはどのような状況ですか
1. 狭い 2. まあまあ広さ 3. 広い
4. その他()
2) 子どもたちの居場所がありますか
1. ある 2. ない 3. その他()

(15) 家族の食事についてお答え下さい。

- 1) 家族の食事を作る時に先ず考えることはどんなことですか
1. 調理時間や手間がかからない 2. 健康、栄養 3. 家族の好き嫌い
4. その他()
2) 家族が揃って食事をしますか
(1) 朝食—1. 全員揃って食べる 2. 大半揃って食べる 3. ばらばらに食べる
(2) 夕食—1. 全員揃って食べる 2. 大半揃って食べる 3. ばらばらに食べる

(16) 子どもの食事の与え方についてお答え下さい

- 1) 食事の
1. 三食きちんと与える 2. 時+朝食抜きとことがある 3. 朝食抜きが多い
2) 食事の時間は
1. 大体一定している 2. 日によって違う 3. 子どもが要求した時に与える
3) 食事の問題
1. 問題ない 2. 問題がある
(1) 朝食 (2) 食が細い (3) 夕食 (4) 夜食 (5) 過食 (6) 過食 (7) その他()
4) 食事の問題がある場合どうしますか
(1) お母さん自身
1. 単立調理法を工夫する 2. 遊びなど子どもの生活全体を配慮する
3. 習慣も変えない 4. その他()
(2) 食事のとき
1. 話さず食べる 2. よく噛ませる
3. 叱ったりきびしくしつける 4. その他()

(17) おやつについてお答え下さい

- 1) おやつは
1. 大体一定している 2. 日によって違う 3. 子どもが要求した時に与える
2) おやつは玉にどうしていますか
1. 母親が用意する
2. 子どもが自由好きなものを取り出す
3. 子どもに自由に買わせる
* 一日の金額をきめて 円
* 特にならぬ

内藤他：家庭の機能変化に伴う福祉需要と児童の養育に関する総合的研究

13) お子さんの一日の生活はおおむねどのようになっていますか。次の記入例を参考にして下の段に①起床-⑪就寝までの時間を番号で記入して下さい。

①起床 ②朝食 ③保育園、幼稚園、学校の生活 ④昼食
⑤外出び ⑥内遊び ⑦夕食 ⑧塾、けいこ事 ⑨学業保育 ⑩就寝

午前	0時	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	午後	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12時
記入例																										
午前	0時	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	午後	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12時

14) お宅の育児、しつけ、教育についておたずねします

- 1) お子さんのしつけについて主に誰の意見が中心になっていますか。
1. 父 2. 母 3. 両親で話し合う 4. その他()
- 2) どんな子どもに育てたいと思いますか。次の中から一つだけ○印をつけて下さい。
1. 元気でびのびした子 2. 素直で言うことをきく子 3. 男らしい子、女らしい子
4. 利発で勉強の出来る子 5. 歌などの才能のある子 6. 創造性のある子
7. 思いやりのある親切な子 8. 誰とでも仲よく遊ぶ子 9. 責任感のある子
10. 我慢強い子 11. 自立したしっかりした子 12. 自分の意見を主張できる子
13. その他() 14. 特に考えていない 15. わからない

15) 1) 現在、このお子さんのことで気になることがありますか。

1. ない 2. ある

- 2) それはどんなことですか。該当するものに○印して下さい。
1. 健康状態 2. 身体の発育程度 3. 知恵や言葉の発達程度
4. 食事のこと 5. 性格 6. くせ(吃り、指しゃぶり、夜尿など)
7. 友だち関係 8. 集団生活 9. 夫婦関係の子どもの影響
10. その他の家族の人間関係 11. その他()

16) あなたは次のような場合主にどうしますか。次の1から6までの各の中からそれぞれ一つを選び右側の欄の中に番号を記入して下さい。

1. 体調をよめる	2. 強く叱る
3. 言いませる	4. 放っておく、無視する
5. 子どもの悪い分をきいて応じてやる	6. まだそうい経験はない

1) 食事、着がえなどぐずぐずして時間がかかる時

2) 自分で出来るのに甘えてやろうとしないう時

3) 親がいけないと言っていることをやめた時

4) 食事についてまづいとか不満を言った時

5) 母親が仕事に追われて忙しいに遊び相手になって欲しい時

6) 親が来客と話している時に騒いだり、客に対して失礼な行動をとる時

7) 店の前で物を欲しがっておねだりする時

8) バスや電車の中で騒いだり走りまわったりした時

17) 1) 将来このお子さんにどの程度の教育をうけさせたいと思いますか。

1. 中学まで 2. 高校まで 3. 短大、高等まで
4. 大学まで 5. 大学以上 6. その他()
7. まだ考えていない 8. わからない

2) その理由を次の中から一つだけ選んで○印をつけて下さい。

1. 社会生活のため必要だから 2. 巾広い教養を身につけさせたい
3. 皆が行くから 4. 学歴は不要だから
5. 学業社会だから 6. 家業を考えて
7. 本人の能力によってきめる 8. 経済上の理由から
9. 親自身が行きたくも行けなかったから 10. 子どもの希望に従って
11. その他() 12. 考えていない
13. わからない

18) 将来、このお子さんがどんな人になってほしいと思いますか。次の中から一つだけ選んで○印をつけて下さい。

1. 社会のためにつくす人 2. 家庭を大切にす人
3. 経済力のある人 4. 人間味のある人
5. 社会的地位のある人 6. 知識や経験の豊富な人
7. 自分の才能を生かせる人 8. 家業を継いでくれる人
9. 家事能力のある人 10. 自活できる人
11. 家族に思いやりのある人 12. 平凡な人
13. その他() 14. 特に考えていない
15. わからない

19) 将来、お子さんが結婚した後のことについておたずねします。

お子さんと一緒に住みたいですか

1. できれば同居したい 2. できれば別居したい
3. その他() 4. 考えていない
5. わからない

20) 1) あなたが当地に住んだのはいつ頃からですか。

1. 生まれ時から 2. 結婚前 3. 結婚後 4. 子どもが生まれてから

2) これからも当地に住みたいですか。
1. ずっと住みたい 2. 住みたくない 3. 考えたことない 4. おろかな

21) もし、次のようなことで(1)育児のこと (2)子どものしつけや教育のこと (3)家庭内のいざこざ (4)病気・健康のこと)困った時には誰に相談しますか。該当する欄にいくつでも○印をつけて下さい。

	①父	②母	③その他 の家族	④近 所の 人	⑤友 人	⑥保 護 所	⑦幼 稚 園・学 校	⑧電 話 相 談 所	⑨電 話 相 談 所	⑩病 院・医 生	⑪其 他	⑫ 児 童 相 談 所	⑬ 児 童 館	⑭ 乳 児 院	⑮ 児 童 相 談 所	
1) 育児のこと																
2) 子どものしつけや教育のこと																
3) 家庭内のいざこざ																
4) 病気・健康のこと																

22) 地域の保健・福祉施設で何が不足していますか。必要と思われるものを三つだけ選んで○印をつけて下さい。

1. 保健所 2. 総合病院 3. 診療所・医院
4. 福祉事務所 5. 児童相談所 6. 保育所 託児所
7. 幼稚園 8. 学校 9. 児童館
10. 学童保育所 11. 公園・遊び場 12. 乳児院
13. 養護施設 14. 心身障害児施設 15. 母子家
16. 老人福祉施設 17. その他()
18. わからない

23) 最近職業をもつお母さんがふえていますが、そのことについておたずねします。

1) 母親が職業をもつことについてどう思いますか

- 1. 賛成 2. 反対 3. どちらともいえない 4. わからない

Form with two columns for reasons. Left column: 1. 家計の助けになる, 2. 生活に張りができる, 3. 視野が広がる, 4. 自分の自由になるお金が入る, 5. 子どもの過保護・干渉しなくなる, 6. その他. Right column: 7. 家事が楽になる, 8. 夫の出世がよくなる, 9. 子どもの世話が出来る, 10. 近所づきあいが悪くなる, 11. 母親の負担が多くなる, 12. その他.

2) 3歳前の小さい子どもを保育園に預けることをどう思いますか。

- 1. 賛成 2. 反対 3. どちらともいえない 4. わからない

Form with two columns for reasons. Left column: 1. 規則正しい生活ができる, 2. いろいろなことが学べられる, 3. 早くから自分のことが自分でできる, 4. 友だちができる, 5. 遊び場がある, 6. 専門家に育てられることがよい, 7. その他. Right column: 8. 病気の感染心配である, 9. 悪いことを学べる, 10. 子どもがかかわらぬ, 11. 個性が育たない, 12. 親子の絆が少なくなる, 13. 親が家庭で育てるべきである, 14. その他.

24) 1) あなたの家事以外のお仕事についておたずねします。次の1から6の中で該当するものに○印をつけ 内記入して下さい。

- 1. 現在職業もっていない
2. 毎日勤めに出かける (出勤時間, 帰宅時間)
3. パートで勤めに出ている (週日, 時間帯)
4. 家業を手伝っている (週日, 時間帯)
5. 内職を家で作っている
6. その他
2) このお子さんの平日の帰宅時間はかまよ何時何分ですか。

25) 質問24) 1) で 1.現在職業をもっていないに○印をつけた方にたずねます。

1) 以前、仕事をしていたことがありますか 1. ない 2. ある

2) 仕事をやめたのはいつですか

- 1. 結婚前 2. 結婚にあたって 3. 出産にあたって 4. 子どもの入園にあたって
5. 子どもの入学にあたって 6. その他

3) 将来、仕事をもちたいですか 1. はい 2. いいえ 3. わからない

Form with 6 items: 1. 子どもが 歳になったら, 2. 適当な仕事があれば, 3. 保育園があれば, 4. 学童保育があれば, 5. 家族の理解があれば, 6. その他

ここからは、お仕事をもらっているお母さんだけ記入して下さい。

26) 1) あなたが仕事をしている間、どこにお子さんを預けていますか。

- 1. 預けている 2. 預けていない

Form with two columns for childcare locations. Left column: 1. 主に預けている所を一つだけ○印して下さい (公立保育所, 無認可保育所, 共済保育, 児童館, 幼稚園, 親戚知人の家, その他). Right column: 1. 母親が仕事をしながらみる, 2. 子どもだけ家におく, 3. 家で家族がみる, 4. 家で家族以外の人がみる, 5. その他.

2) いつも二か所以上のところに預けていますか 1. 預けている 2. 預けていない

それは 25) 2) で○印した以外はどこですか

27) あなたが仕事をもっているためにお子さんのこととお母さんのこと、心配なことは何ですか。

- 1. 子どもと一緒にいる時間が少ない
2. 留守中の子どもの様子がわからない
3. しつけができない
4. 子どもの気持ち不安定になる
5. 勉強をみてやれない
6. 事故が心配
7. 子どもの病気のときみてやれない
8. 預けている人としつけがくい違う
9. 保育時間が短かすぎる
10. 園や学校の行事に行かれない
11. 他の親や先生と話し機会がない
12. その他
13. 困ることはない

幼児健診票

Header form with fields for name, address, and date.

Form for sex and birth date.

Main body of the health check form with various assessment items like (8) 片足ジャンケン, (9) 両足がもつれて転ぶ, (10) 本のページを1枚づつめくる, etc.

Large table for recording health check results over time, with columns for date, name, and various assessment items.

Footnote text at the bottom right of the page.

⑤ あなたのお仕事についておたずねします。

1) あなたは常勤ですか。パートですか。

1. 常勤 2. パート(午前)時から(午後)時まで 週()日

2) あなたの一か月の勤務はどのような形態ですか。

- 1. 日勤 ない ある(午前)時から(午後)時まで 1か月()回
- 2. 準夜勤 ない ある(午前)時から(午後)時まで 1か月()回
- 3. 深夜勤 ない ある(午前)時から(午後)時まで 1か月()回
- 4. その他 ()

3) 勤続年数 現在の病院では()年()か月

通算 ()年()か月

4) 転職回数 ない ある()回

5) 現在の職業を続けたいですか。

- 1. ずっと続けたい。()
- 2. 勤務条件を変えて続けたい。(その条件)
- 3. やめて別の仕事に就きたい。(どんな仕事)
- 4. あと()年くらい続けたい。(理由)
- 5. 結婚まで続けたい。(理由)
- 6. 出産まで続けたい。第一子 第二子 第三子(理由)
- 7. できればやめたい。(理由)
- 8. すぐやめたい。(理由)
- 9. 何ともいえない。()
- 10. わからない。()

⑥ 最近職業をもつお母さんがふえています。それについてどう思いますか。

1. 賛成 2. 反対 3. どちらともいえない 4. わからない

主な理由に○印して下さい

- 1. 家計の助けになる
- 2. 生活に強りができる
- 3. 視野が広がる
- 4. 自分の自由になるお金が入る
- 5. 子どもの過保護・干渉しすぎなくなる
- 6. その他()

主な理由に○印して下さい

- 7. 家事があるそかになる
- 8. 夫の世話が少きとどかない
- 9. 子どもの世話が出来ない
- 10. 近所づきあいが悪くなる
- 11. 母親の負担が多すぎる
- 12. その他()

⑦ 現在、小学生以下のお子さんをおもちの方におたずねします。

1) あなたがお仕事をしている間お子さんをどこに預けていますか。日中どうしているかは、下の枠の中の該当する番号を記入し、準夜勤、深夜勤の場合は、どこで、誰がみているか、その状況を具体的に記入して下さい。

お子さんの年齢	日 中			準夜勤の場合		深夜勤の場合	
	午前	午後	夕方	どこで誰がみているか	困ること	どこで誰がみているか	困ること
()歳							
()歳							
()歳							

- ①公立保育所 ②私立保育所 ③無認可保育所 ④職場保育所 ⑤共同保育 ⑥保育ママ
 ⑦児童館 ⑧幼稚園 ⑨親戚・知人の家に預ける ⑩子どもだけで家におく
 ⑪家で家族のみ(誰が?) () ⑫家で家族以外の人のみ(誰が?) ()
 ⑬その他()

2) あなたが仕事をもちながらお子さんを育てるうえで困ること、心配なことは何ですか。

⑧ 現在、中学生以下のお子さんをもちの方におたずねします。

1) お子さんが小さい時、誰に預けて仕事をしていましたか。

当時の職業	有 無	日 中			準夜勤の場合		深夜勤の場合	
		午前	午後	夕方	どこで誰がみていたか	困ったこと	どこで誰がみていたか	困ったこと
赤ちゃん時代								
幼児期								
小学生時代								

⑨ 1) の質問と同じように枠の中の番号を記入して下さい。

2) 当時、仕事をもちながらお子さんを育てるうえで困ったこと、心配なことは何でしたか。

⑩ 職業を続けながら子どもを育てるためには、どのような施設(保健・福祉など)が必要だと思いますか。